

東日本大震災の再生過程に若者の参加を

住友商事 東日本再生

ユースチャレンジ・プログラム

5年の挑戦



はじめに

東日本大震災の発生を受け2012年度にスタートした「住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム」(以下、「本プログラム」)は、5年間の支援を終了しました。プログラムにおけるユースの活躍・成長をご紹介します、さらには今後の災害支援において若者による支援活動の情報源となることを期待し、本冊子を刊行することと致しました。

当社は東日本大震災以降、「息の長い復興支援」というコンセプトを掲げ、復興支援活動に取り組んできました。被災地や被災者に寄り添った支援活動を継続的に行おうという思いを込めたものです。震災があった2011年には、災害ボランティア活動で、約160名の社員が現地で汗を流しました。

その後、復興フェーズに沿った本格的な支援プログラムを検討しましたが、当時、被災地で展開されていた様々な支援活動の中で、高校生や大学生などの次世代を担う人材による活動を後押しする仕組みが欠けていることが分かりました。そこで、特定非営利活動法人市民社会創造ファンドの方々の多大なるご協力のもと、本プログラムを立ち上げるに至りました。

本プログラムでは、被災地で活動する団体の活動・研究への助成やインターンシップへの支援を行い、現地のみならず全国から集まった合計133の学生団体・NPO等、74名のインターンを後押ししました。ユース達は主体的に地域の課題を探り、地域に求められる支援を考え、地域の方々との対話を通じて企画・行動に移しました。

ユースが活躍する姿から、震災の復興にはハード面の復興のみならず、ユースならではの心の通ったソフト面の支援が重要であることを改めて感じました。地域の中で周囲の大人がユースをサポートする動きが活性化し、あるいは、ユースが地域の方とともに地域の再生のビジョンを語り合い、若者の視点から発信する等、被災地で様々な成果が得られました。プログラムの後半では震災からの時間の経過に伴い、支援ニーズの多様化や課題の難易度が増していく中、悩みながらもあきらめずに取り組んだ姿勢は、後輩たちにも引き継がれています。

本プログラムで成長したユースが、今後は地域の中心的な役割を果たし、次世代を担う存在として、これからも活躍されることを願っています。また、当社も、被災地の変化を感じ取り、残された課題に真摯に向き合いながら、引き続き「息の長い復興支援」に取り組んでいきます。

被災地の再生に向けた 若者たちのチャレンジ

特定非営利活動法人市民社会創造ファンド
運営委員長 山岡義典

被災地にもっと若者を

「東日本の復興に向けて長期的な視点で取り組みたい」。このようなお話しを住友商事の社会貢献の担当者から頂いたのは、発災から4カ月余り経った2011年7月の頃であった。これまでは被災地に社員ボランティアの派遣を行ってきたが、緊急救援の時期はほぼ終わりに近づいたので、次のステップとして今後5年を目的に新しい取り組みをしたいとのことであった。こうして住友商事と市民社会創造ファンドの対話が始まった。

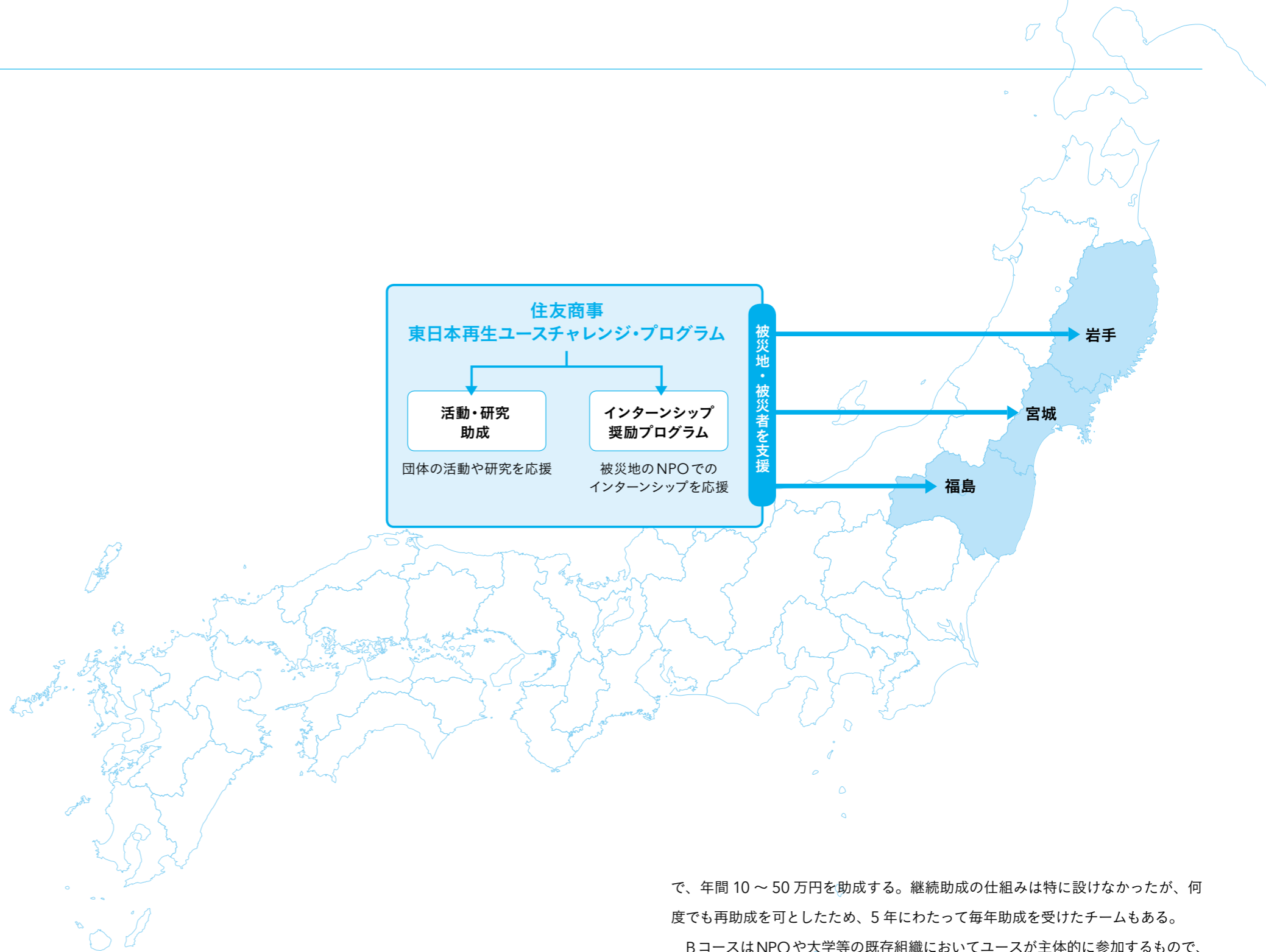
被災した方々が避難所から仮設住宅へと移り始めた頃で、今後2年余りは仮設住宅での不安定な生活が続く。そしてその後は、復興住宅への移住が順次進んで新しいコミュニティ形成が課題になるだろう。そのような見通しの5年間に、ボランティアやNPOに何ができるのか。それに企業はどのような協力が可能なのか、特に住友商事に相応しい独自性のある支援とは何なのか。

このような議論を重ね、必要な調査を行い、被災地の再生過程には若者のチャレンジがもっと必要ではないか、という結論に至った。被災地から次第に若者たちの姿が見えなくなっていくことを感じていたからだ。そのためにはどのようなプログラムを組むか、それをどう実施するか、現地を視察して関係者の意見も聴きながら、考えを詰めていった。こうして誕生したのが、「住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム」である。テーマを「東日本の再生過程に若者の参加を」と定め、右頁の図のように2つのサブ・プログラムで構成した。若者たちの参加のための多様な選択肢を用意しているところに特徴がある。

2つのコースによる活動・研究助成

一つのプログラムは、被災地の地域再生や被災者の生活再建を目指した「活動・研究助成」で、A・Bの2つのコースがある。

Aコースは大学生などの若者たちが、自ら任意のチームを組織して取り組むもの



で、年間10～50万円を助成する。継続助成の仕組みは特に設けなかったが、何度でも再助成を可としたため、5年にわたって毎年助成を受けたチームもある。

BコースはNPOや大学等の既存組織においてユースが主体的に参加するもので、年間50～300万円を助成する。2年までの継続助成を可能としており、1年を空ければ再助成も可能としたため、2回の継続助成を受けた団体もある。

A・B両コースとも、活動は被災3県（岩手・宮城・福島）や県外の避難先となるが、ユースや組織の場所は全国どこでもよい。2012年度は少し遅れてスタートしたものの、2013年度からは毎年10月に公募して11月から翌年3月にかけて選考を行い、4月から1年間の助成を行った。

4月には東京で贈呈式を兼ねたスタートのワークショップを行い、9月には中間報告を兼ねたユースチャレンジ・フォーラムを東京や仙台で行った。これらの場で助成を受けた若者たちが出会い、相互に理解を深め、刺激し合い、熱気に満ちた

交流をする。その後に色々な繋がりも生まれたようである。

9ヶ月にわたる長期インターンを奨励

もう一つがインターンシップ奨励プログラムだ。地域の再生に取り組む被災3県のNPOで、学生や院生が7月から翌年3月にかけて9ヶ月に及ぶインターン活動を体験する。インターンは、各県ごとに行う事前研修・入校式（午前・午後の同日開催）や中間報告会、それに修了報告会に参加する。これらもインターンが主体的に企画し、運営する。インターンには、活動時間に応じた活動奨励金（800円/時で上限300時間）や交通費を支払う。2万円までの研修補助費も支払い可能だ。

受入れ団体には、3つの条件をお願いした。総括的な受入れ指導者としてのスーパーバイザーを置くこと、日常的な相談に乗ってくれるメンターを置くこと、大まかでいいからカリキュラムを定めることの3点である。また前述の入校式や報告会にも参加してインターンの成長を見守る。各県の受入れ団体の一つには、現地協力団体になってもらい、そのスタッフやインターンが各県内のインターンの連絡役となり、サポートをする。入校式や中間報告会や修了報告会も主催し、県内外の受入れ団体の相互訪問などの交流イベントを企画することもある。2012年度に宮城県で開始、翌年には福島県で、その翌年には岩手県で開始し、各県とも2016年度で終了した。

5年を終えて

このプログラムの目的は、何よりも被災地の再生と被災者の生活再建に貢献することにある。同時に、その過程に参加する若者たちの成長も願っている。プログラム運営では、この2つの目的の相互作用を促し、相乗効果を高めることが課題になる。その課題は、Aコースの助成とBコースの助成では異なり、またインターンの奨励でも異なる。

若者たちの活動現場は様々であるが、仮設住宅やその関連する地域が多かった。厳しい日々の生活環境の中に、時々ではあれ若者たちの発想による異空間が出現することは、生活再建に向けての勇気や希望を喚起したのではなかったかと思う。そのことが、その後の地域再生へ向けた大きな力にも繋がってほしいと願っている。

活動紹介

多様なユース・チャレンジ

- > 大学・高校の有志グループによるチャレンジ
- > NPOへの参加を通じたチャレンジ
- > 大学ボランティアセンターを通じたチャレンジ
- > 現地NPOのインターンを通じたチャレンジ



失敗も悩みも、一つでも多くの笑顔につながれば喜びに変わる

団体名
学生による地域支援活動団体みまもり隊

プロジェクト名
東松島地野菜プロジェクト

宮城県東松島市。津波による深刻な被害を受けたこの地域で、被災した農家の支援に取り組むのが「学生による地域支援活動団体みまもり隊」です。仙台周辺地域の学生が集まり結成されました。地域にむけた想いを新旧リーダーから伺いました。



団体のメンバーの渡辺さん(左)と前代表の菅さん(右)

撮影：橋本裕真



「空の駅」では地域の団体とともに定期的にイベントを開催している

団体プロフィール

学生による地域支援活動団体 みまもり隊

プロジェクト名：東松島地野菜プロジェクト
活動エリア：宮城県東松島市

助成年：2012年、2013年、2015年、2016年
助成額：49万円、49万円、49万円、50万円
設立年：2011年

団体概要：

仙台周辺の大学に通う学生を中心に結成。津波の被害を受けた宮城県東松島市において、地元住民とともに「東松島地野菜プロジェクト」を実施。東松島ならではの野菜を生み出すことで地域のPRを行い、東松島の活性化を目指す。

URL：

<http://mimamori311.wixsite.com/mimamoritai>

渡辺華奏未さん

宮城学院女子大学 学芸学部 英文学科 4年

故郷に活気を取り戻したい

私の地元、東松島では土地の6割が震災による津波の深刻な被害を受け、子どもの頃から「日常」だと思っていた多くのものが失われました。復旧が一通り終わった後も、震災で故郷を離れた人たちは戻らず、街は今も閑散としています。みまもり隊が活動拠点とする沿岸部の牛網地区では、震災前の約600世帯から16世帯にまで住民が減少しました。故郷に少しでも元気を取り戻したい、それがみまもり隊に私が参加した理由でした。

みまもり隊は、震災直後から東松島の被災農家の支援に取り組んできました。「地野菜プロジェクト」は2014年から本格始動した取り組みで、東松島ならではの野菜をつくることで再び人を呼びたい、という地元農家さんの思いから生まれたものです。

思いを次代に繋ぐ

農作業の体験、そして、自分たちが育てた野菜を使った試食会やバーベキューなどのイベントを通じた人との出会いなど、活動の中でたくさんの感動がありました。学校の友達だけで人間関係が完結していた頃には到底得られなかったさまざまな気づきもありました。もともと私は国際関係の仕事に就きたくて英文科に進学したのですが、東松島のために働きたいという思いがだんだん強くなり、卒業後の進路も海外志向から地元志向へと方向転換しました。

地野菜づくりには最低でも3年はかかるといわれています。満足いく結果が出るまで、これから何年かかるのかわかりませんが、みまもり隊の発足当時からかかわってきた先輩方や地元の人たちの思いを大切に後輩たちに繋いでいきます。



農作業に勤しむ学生たち(写真：団体提供)

菅京子さん

東北大学 農学部 植物生命科学科 4年

日本の農業の未来とチャレンジ

「東松島地野菜プロジェクト」は、候補となる野菜の選定からスタートしました。印象に残るためには見た目のインパクトが必須と考え、インターネットや図書館で国内外の野菜を調べて、種を取り寄せました。白い茄子やミニゴーヤ、紫色のネギなど栽培した野菜は40種を超えます。栽培記録をもとに東松島の風土に合った野菜を選別し、農法や調理法についてもメンバー間で意見を出し合いました。東松島の小野仮設住宅で生まれたキャラクター「おのくん」とのコラボで野菜の宅配サービスを実施するなど、PR活動にも取り組みました。

農学部とはいえ座学の知識しかなかった私は、鋤の使い方から水遣りの仕方、野菜の掘り方まで地元農家さんから実地で教わりました。手間と時間をかけた分だけ返ってくる、という精神で働く農家さんの姿に心を打たれ、人とつながりながら地域で農業を営んでいくしくみをつくることこそが日本の農業を維持するためには必要だ、とつくづく感じました。

見守るつもりが見守られて

現地での活動は、基本的には週一回。雑草に負けたり、収穫時期を過ぎてしまったり、肥料を効果的に上げられなかったり……その結果、味が満足のものにならないこともありました。地域の人との関係作り、モチベーションの維持も大きな課題でした。

失敗や悩みはたくさんありました。でも、それが最終的に一つでも多くの笑顔につながれば大きな喜びに変わる、という得難い体験をしました。みまもり隊といいながら、逆に農家さんをはじめ、地元の社会人ボランティア団体の方や仮設住宅のお母さん方など東松島の人々に見守られて、活動を続けることができました。卒業後は、OBとしてみまもり隊を支えるとともに、社会での活躍を通して恩返しをしていきたいと考えています。



ミニゴーヤ、白かぼちゃなど様々な野菜を育てて収穫した(写真：団体提供)

一番の宝物は、地域の方との間に 築いてきた心の繋がり

団体名
スタ☆ふくプロジェクト

プロジェクト名
福島を感じて考えるスタディツアー

地震、津波、そして原発事故による被害を受けた福島県で、メディアを通して語られる事柄に囚われず、学生が自らの目で見えた福島をスタディツアーで伝えるのが「スタ☆ふくプロジェクト」です。学生が発信する福島の「リアル」とは何かを伺いました。



プロジェクト代表の菊地さん

撮影：橋本裕貴



写真やイラストで彩られたツアーごとのアルバム

団体プロフィール

スタ☆ふくプロジェクト

プロジェクト名：福島を感じて考えるスタディツアー

活動エリア：福島県各地

助成年：2014年、2015年、2016年

助成額：50万円、50万円、50万円

設立年：2013年

団体概要：

学生団体 JASP 福島支部のプロジェクトとして発足。福島県内各地において、漁業や農業などの交流体験型のスタディツアーを企画・実施。東日本大震災後の福島の現状やそこに生きる人々の想いを参加者に五感で感じてもらうこと、地域活性化の一助となることを目指す。

URL：<https://sutahuku.jimdo.com/>

菊地実咲さん

福島大学 人間発達文化学類 3年

福島の復興のために

「福島を知る、体験する、考える。」——これが、スタ☆ふくプロジェクトのテーマです。地域の方から直接話を聞き、漁師さんと一緒に漁船に乗ったり、農家の方と農作業をしたり、といった体験や交流を通じて、福島の現状と課題、そして未来をともに考えていこう、というのが、この活動のねらいです。

メディアが伝える福島は実際の福島の姿とは違う、という違和感が、私たちの活動の原点でした。「風評被害」のひとつで簡単にまとめられてしまいがちですが、福島の人間がどんな日常を送り、その中で何を考え、どんな思いしているのか、福島で暮らす私たち自身が主体的に発信していくべきではないか、そして、それが福島の復興のために私たちができることではないか、と考えたのです。

活動で得られたもの

震災被害の中でも、原発事故という福島の特殊性を考えると、復興支援はこれから先もずっと続いていくものでなくてはなりません。おかげさまでスタ☆ふくプロジェクトは今年で設立5年を迎えました。これまで福島県内7地域で18回のツアーを企画・実施し、全国からのツアー参加者はのべ約420人にのぼりますが、やっぱり一番の宝物は、地域の方との間に築いてきた心の繋がりです。

「学生は、もっと自由にやりたいことをやっていいんだよ」と、励ましの言葉をよくいただきます。地域の方から見ると、学生なんて、まだ何もわかっていない子どもです。でも、だからこそ、かわいがってもらえるし、ツアーの改善点などの意見や要望も率直に言ってもらえる。そういう点は、逆に私たちの強みだと実感しています。



いわき水産漁業ツアー 2015の様子 [写真：団体提供]



ツアーの前には入念な打ち合わせ [写真：団体提供]

福島出身者として

私は生まれも育ちも福島市です。東日本大震災が発生したときは14歳。春から中学3年生という時期でした。同級生には避難区域からの転校生もいたし、学校が除染されて線量が下がった後も市内にはホットスポットと呼ばれる場所がありました。でも、当時の私は、「風評被害」は自分とは直接関係ない、という意識でした。そもそも中学生の私には、自分を取り巻く環境に対して、何をどうしたらいいのかわからなかったし、どうすることもできなかったのです。

スタ☆ふくプロジェクトに参加したのは、活動拠点である福島大学に入学した直後です。福島の本当の姿が知りたいと県内外からツアーに参加して下さる人たちが、前向きにがんばっている地元の大人の方たちと交流するなかで、なにより私自身が大きく変わっていったと思います。将来は、福島の子どもたちが自分の未来についてしっかり考えながら成長していく手助けができるような、そんな仕事に就きたいと考えています。

福島の「リアル」を発信

福島という土地や人の魅力にも改めて気づかされました。ふるさとなんて特に意識したことはなかったけど、今では、福島は私にとって、いつでも戻ってこられる場所、そして、かけがえのない大切な場所となりました。ツアー参加者の方にも、福島を好きになってもらえたら、うれしいですね。

震災から6年。ツアーを通して、福島の生産者の真摯な取り組み、そして正しい情報を伝えることの必要性をますます強く感じています。一方で、福島そのものがもつ魅力も、もっとアピールしていきたいと思います。両方の面を大切に、福島の「リアル」をこれからも発信し続けます。



会津日本酒ツアー 2017の様子 [写真：団体提供]

何年先も、陸前高田と交流する 若者を増やす

団体名

一般社団法人 SAVE TAKATA

プロジェクト名

岩手県陸前高田市における人口流出の課題解決のための若者による若者流入プロジェクト「若興人の家」

震災の影響で著しい人口流出が続く陸前高田。「SAVE TAKATA」は、地域の声とユースたちの声を掛けあわせながら、陸前高田の魅力を実感できる“しくみ”を作り、交流を生み出しています。その交流から生まれてきたものについてお話しいただきました。



団体代表の佐々木さん

撮影：橋本裕貴

団体プロフィール

一般社団法人 SAVE TAKATA

プロジェクト名：岩手県陸前高田市における人口流出の課題解決のための若者による若者流入プロジェクト「若興人の家」

活動エリア：岩手県陸前高田市

助成年：2013年、2014年

助成額：284万円、294万円

設立年：2011年

団体概要：陸前高田市の地元出身の若者が中心となり設立。「地域課題を解決するしくみをつくる」ことを目的に、若者流出、農業漁業の衰退、情報格差等の課題解決に取り組んでいる。本プロジェクトでは、若者が活動する拠点「若興人の家」として築60年の民家を若者自身の手で改修。その過程において若者が地域との関係を深めている。
URL：<http://savetakata.org/>



完成した若興人の家の内部

佐々木信秋さん

一般社団法人 SAVE TAKATA 代表理事

過疎化対策としての若者“流入”

津波による壊滅的な被害から復興を進める一方で、「過疎化が20年進んだ」といわれる陸前高田。「若興人の家」は、この地でさまざまな地域課題に取り組む「SAVE TAKATA」が立ち上げた学生主体のプロジェクトです。「何年先も陸前高田と交流する若者を増やすこと」をミッションに活動しています。

僕は陸前高田で生まれ育ち、高校卒業と同時に東京に出ました。陸前高田を出たくて仕方なかった僕が、震災を機に故郷に戻ったのは不思議な気がします。でも、十代の頃に、もっと大人たちが地域の良いところを教えてくれたら、陸前高田で暮らすという選択肢は人生設計の中に当然あったと思います。

じっくりと試行錯誤ができた

助成していただいた2013～14年は、プロジェクトの基盤となる時期でした。ボランティアなどで陸前高田を訪れる学生の拠点にしようと、空き家になっていた古民家を「若興人の家」と名付けて改修するところからスタートし、地元の人に取材した冊子の発行、交流会などを実施。2年間で、のべ400人余りの若者が活動に参加しました。現在、若興人の家は子どもたちの居場所としての利用や、大学生による中学生への授業なども予定しており、より地域へと活動が広がっています。学生たちが熱い議論を交わしながら、じっくりと試行錯誤できたあの2年間はあったから、今とこれからがあると実感しています。

陸前高田を「第二の故郷」とする若者たちも育ってきました。第1期リーダーの女子学生は、学校の課題をこなしながら寝る間も惜しんで陸前高田に通い、東京で就職した現在はOBとして若興人の家を支え、将来の移住も視野に陸前高田に通っています。彼女の熱い思いは後輩にも受け継がれています。

交流を通じた心の復興

地域との交流は、地域に必要とされる活動に、地域の方と一緒に取り組むことによってこそ深まると僕たちは考えます。2016年には、「失われた街」模型復元プロジェクト(→12ページ)のご協力で震災前の陸前高田を復元した模型の展示を行い、地元の方々から思い出話をうかがいました。その後、さらに取材して冊子「たかたる。—高田の人が高田を語る」を発刊し、陸前高田の魅力の発掘にも努めました。

陸前高田では、みんな誰かを震災で亡くしています。だから、住民同士では震災や家族にまつわる話はまずできません。それが、復元模型の展示や冊子の取材で学生が来ると、みんな熱心に自分から語り出すんです。若い人に自分の思いを繋げていきたいんですね。話を聞く学生も、陸前高田という地域への理解を「情報」としてではなく「思い」として深めていきます。震災のつらい記憶を乗り越えるのではなく、一緒に生きていこうと思えた時に一人ひとりの心の復興は訪れるのかもしれない。若者にはそれを可能にするパワーがあると僕は信じています。

若い人を呼びたくなる街へ

「こんな何もない田舎町にきて何が楽しいの」と陸前高田の人は言います。でも、今それを学生たちがどんどん覆している。食べ物がおいしい、人が温かい、自然もいっぱいある、この街が好きだ、って。最近、地元の人たちが「今度、うちに泊まりにおいでよ」と学生を陸前高田に招くようになったんです。学生が来ると必ず彼らを昼飯に連れ回して下さる方もいます。陸前高田の人が外からの若い人を受け入れ、また自ら呼び込もうとしている。その姿に、心の復興に向けた明るいさを感じています。



若興人の家の裏庭は畑になっている



改修中の様子(写真：団体提供)



企画・立案もユース主導で行われる(写真：団体提供)

街はそれぞれの人がある場所に置いて いったさまざまな「思い」でできている

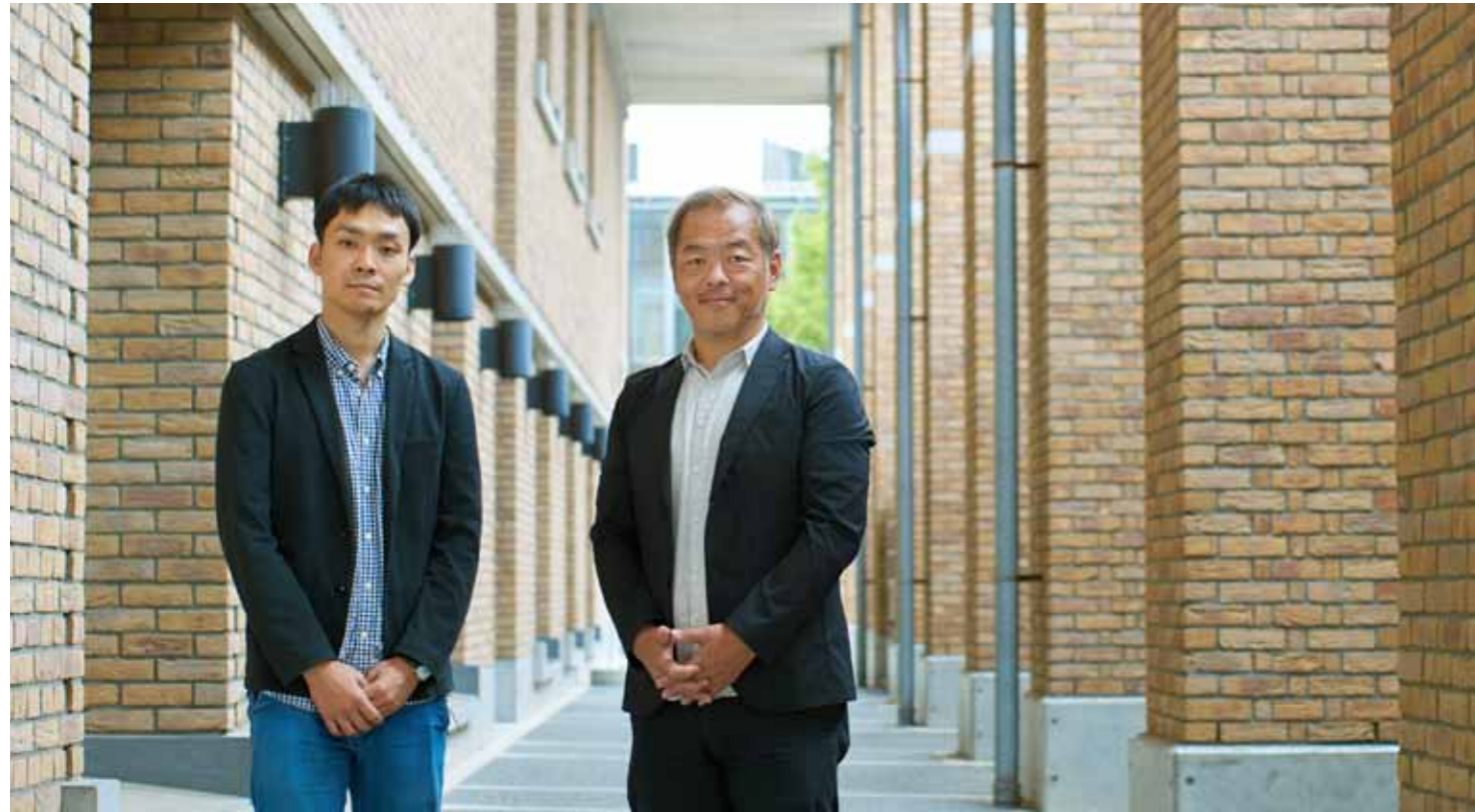
団体名

「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会

プロジェクト名

建築学生による「記憶の街」復元模型ワークショップ
開催を通じた福島県・東日本大震災被災地における
記憶の保存・再生プロジェクト

街には情報だけではなく様々な人の時間や思いが詰まっています。このプロジェクトでは、被災した街に残された時間や思いを、建築学生たちが地域の人とともに模型を使って可視化しています。そのプロセスや展開について伺いました。



プロジェクト代表の磯村さん(左)と槻橋准教授(右)

撮影：橋本裕貴

団体プロフィール

「失われた街」模型復元プロジェクト
実行委員会

プロジェクト名：建築学生による「記憶の街」復元模型ワークショップ開催を通じた福島県・東日本大震災被災地における記憶の保存・再生プロジェクト

活動エリア：岩手県、宮城県、福島県各地

助成年：2014年、2015年

助成額：278万円、300万円

設立年：2011年

団体概要：神戸大学・槻橋研究室の呼びかけで、全国の主に建築学を専攻する研究室や各種団体が集い発足。これまでに約40の団体が関わる。震災以前の街並みを復元した1/500の縮尺の模型を制作し、そこにあった人々の暮らしの記憶を保存・継承するために、地域住民の思い出を聞き取りながら模型を使ったワークショップを行う。

URL：http://losthomes.jp/



石巻市鮎川浜の復元模型(制作：名古屋工業大学北川啓介研究室)

槻橋修さん

神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻
准教授・博士(工学)

記憶の中の街を作り上げる

「記憶の街ワークショップ」では、学生が震災で失われた街を白い模型で復元して現地に運び、かつてそこに住んでいた方々に色を塗っていただきながら、震災前の街の記憶や思い出を聞き取ります。そして、それをプラスチックの「記憶の旗」に記して模型に立て、記憶の中に残っている街を作り上げていきます。

これまでに、被災地を中心に43回のワークショップを開催し、63個の「記憶の街」を制作。復元模型の展示会も国内外で行ってきました。岩手県、宮城県に続き、福島県の原発事故によって住民が戻れなくなった地域にも活動の範囲を広げています。

ワークショップの目的は、街の正確な再現ではありません。お花見を楽しみにしていた桜並木、夏祭りの熱気と興奮、子どもの頃の遊び場、プロポーズを受けた浜辺……「記憶の街」は、それぞれの人がある場所に置いていった、さまざまな「思い」からできています。それは航空写真や地図からは決して見えてこない、一人ひとりの人生や日常に結び付いたその人なりに大事だった風景なんです。街を再建するにも、この心の風景が重要だと考えています。

心の復興から地域の再生へ

会場では、震災のショックで記憶が思い出せなかった高齢の方が街の様子を詳細に語り出したり、避難生活でふさぎ込んでいた方が元を取り戻したり、かつての住民同士が再会を喜び、互いに励まし合うなど、さまざまな反応が見られました。中には、「模型を作ってくれてありがとう」と涙ながらに学生に感謝される方もいました。

模型の上には、外から来た若い人に地元の人が語って聞かせるようなもの、つまり、楽しかった思い出や街への愛着が集まります。こうした街の良さの再発見がモチベーションとなり、地域をつくっていくきっかけにもなるのです。

若者にしかできないことがある一方、若者が輝くための舞台を準備するのは大人や社会の役割です。東日本大震災の復興は、長い年月をかけて取り組まなくてはなりません。長期的・継続的な視点で、若者が生み出す価値を育み、地域に浸透させていくことが、今後ますます必要になっていくと思われます。



岩手県一関市での復元模型の展示会場

磯村和樹さん

神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻 槻橋研究室、
一般社団法人 ふるさとの記憶ラボ 代表理事

人と会い、信頼関係を築く

建築を学ぶ学生は普段さまざまなデータを扱いますが、人と直接会って話すことでしか得られないものが、こんなにもたくさんあるのかと驚きました。コミュニケーションを通して住民の方々と信頼関係を築いていくことの大切さも実感しました。

「記憶の街ワークショップ」で、お祭りの情景を表現するために山車のミニチュアを作ったときは、それぞれの山車がどの町に属している、どういう巡行ルートだったのかを住民の方が模型の上で丁寧に説明してくださいました。プロジェクトを通してかわった町や村は、今では私にとって特別な存在となっています。

白い復元模型は、ワークショップの最終日には着色され、無数の「記憶の旗」が立ち並びます。横から覗き込むと「記憶の林」のようで、失われた地域社会の豊かさを改めて感じました。

模型の嫁入りプロジェクト

地域の復興活動に役立てるためにワークショップで作った模型を寄贈してほしい、という申し入れも増えています。復元模型を現地に還元する取り組みを、私たちは「模型の嫁入り」と名付けて力を入れており、現在、陸前高田などで計画が進行中です。

2015年には「一般社団法人ふるさとの記憶ラボ」を設立し、「記憶の街」のデジタルアーカイブ化も進めています。今後、まちづくりやコミュニティづくりのヒントとして、国内外の被災地の復興などに活用できるのではないかと期待しています。



ワークショップ後にはたくさんの「記憶の旗」が立ち並び

被災地支援をととした学生たちの 悩みと成長

団体名
尚綱学院大学エクステンションセンター

プロジェクト名
宮城県名取市被災者支援活動 尚綱学院大学
～名取復興音楽祭を通じたコミュニティ形成プロジェクト～

多くの命が奪われた名取市閑上地区。ここからほど近い尚綱学院大学では、学生たちが立ち上がり、ボランティアステーションとともに住民との交流を大切にしながら支援を続けています。状況に応じて変わる支援のあり方やユースの思いを伺いました。



左から松田さん、渡谷さん、佐々木さん



尚綱学院大学のキャンパス

団体プロフィール

尚綱学院大学 エクステンションセンター

プロジェクト名: 宮城県名取市被災者支援活動
尚綱学院大学 ～名取復興音楽祭を通じたコミュニティ形成プロジェクト～

活動エリア: 宮城県名取市

助成年: 2016年

助成額: 300万円

設立年: 2003年

団体概要: 本センターは、地域住民の「学びの拠点」として設立され、震災後は活動を通じて得られたつながりを活かして地域・市民・学生をつなぐ役割を担ってきた。本助成では、12～15年にわたり本学の学生ボランティアチーム「TASKI」が仮設住宅等での支援活動に取り組み、16年は本センターが主体となり、地域を対象とした面的な支援を展開した。

URL:

<http://www.shokei.jp/institution/extension/>

佐々木真理さん、松田久美子さん

尚綱学院大学ボランティアステーション

プロジェクトについて

名取市では沿岸の閑上地区を中心に、東日本大震災の津波で千人近くが犠牲になりました。本学では震災直後から、学生たちがとにかく何かできることをしたいと「名取市災害ボランティアセンター」などでのボランティアを自主的に始め、2012年6月に、学内に「ボランティアステーション」を設置。年間約100人の学生が登録し、「TASKI（たすき）」というチーム名で、市内の2カ所の仮設住宅で寄り添い支援をしてきました。

当初は住民の皆さんが元気になってほしい、一人にならないでほしいという思いから、クリスマス会や焼きいも大会といった学生主催のイベントを行ってきました。だんだんと住民の皆さんとの交流が深まってくるとイベントという形に頼らず、日頃の畑づくりなどをきっかけに訪問の回数を重ねていき、その後は仮設自治会のお祭りなど住民主体の活動をサポートするといった、より“支える”を意識した活動へと変化していきました。

そして、被災者が仮設や復興公営住宅などの垣根を超え“コミュニティ再生”に向けて交流できるように、また、参加する皆さんのやりがいや生きがい、仲間づくりの場になってほしいとの願いを込めて、2014年より「名取市サポートセンターどっと」と協力しながら、年に一度「名取復興音楽祭」を開催してきました。復興公営住宅へと移る人が増え始めた2015年からは、市内に6カ所ある仮設間の交流の場として、年3回のカラオケ演芸大会も学内のホールで開催。2017年からは、演芸だけでなく手作品なども披露できる「名取復興文化祭」へと形を変え、より多くの方が活躍できるようになりました。日々の活動も、今、目の前にある課題だけではなく、これから先のあたりまえの日々を取り戻せるよう、また住民の皆さんが自らの立ち上がる機会を妨げないよう、学生たちは悩みながらも活動を続けています。

ユースの存在

特に高齢の住民さんにとって学生たちは元気をくれると同時に、孫みたいに話しやすい存在のようです。震災当時の恐怖や不安をようやく語れるようになった方もいて、話を聞いてもらいたいというニーズは年々増えています。もう一方で、学生たちは住民の方から話を聞いて共感し、気持ちに寄り添い、次の活動へとつなげていく過程の中で、人として大きく成長しています。



「名取復興音楽祭」の様子 [写真: 団体提供]

渡谷佳代さん

尚綱学院大学 表現文化学科 2017年3月卒業

参加したきっかけ、そこから得たもの

2年生だった2014年の春に、友人から話を聞いて登録しました。授業が多い2・3年生の頃は、学生が主催する土日のイベントに参加していましたが、4年生になり、時間に余裕ができてからは、「動作法」というリラックス体操やカラオケなど、平日の活動にもお邪魔するようになりました。

ある時、終了後のお茶の時間に住民さんが「仮設住宅を出ていく人が増えて寂しいんだよね」と、イベントの時は決して言わなかった本音を漏らしたことがありました。私は話が得意なほうではなく、何を話せばいいのか戸惑うことも多々ありましたが、ただ場を盛り上げればいわけではなく、そばにいて話を聞くだけで力になれることもあるのだと、この時実感しました。

活動の工夫、後輩に思いを伝える新聞を発行

何のために活動をしているのか、メンバー同士で共有できていない時期もありました。そこで2015年からは、イベントのたびに『ボラステ新聞』を発行し、担当したメンバーが思いも含めて記録に残し、後輩へ伝えていくことにしました。その後、後輩だけでなく学内外の多くの方にTASKIの活動を知ってもらうための広報の役割を果たしています。学内の「ワクドキの六限」という学習会では、講師として「ボランティアを始めて変わったこと」を話したこともあります。

17年の春には地元の企業に就職しましたが、地元紙などが運営する「311『伝える／備える』次世代塾」という講座に通い、今も震災のことを学び続けています。



復興公営住宅での活動の様子 [写真: 団体提供]



仮設住宅での活動の様子 [写真: 団体提供]

「サマーカレッジ」で学んだ環境づくりや声かけを、教員になっても活かしたい

団体名

宮城学院女子大学
リエゾン・アクション・センター(MG-LAC)

プロジェクト名

宮城学院女子大生による
子どもの「日常」再生ネットワーク

「宮城学院女子大学リエゾン・アクション・センター」は、学生たちの専門性を生かしながら子どもたちの「日常の再生」に取り組んできました。自身が感じたつまづきや発見について、活動してきた実感をもとにお話いただきました。



左から金澤さん、小茄子川さん、河野さん

撮影：橋本裕貴

団体プロフィール

**宮城学院女子大学
リエゾン・アクション・センター
(MG-LAC)**
プロジェクト名：宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク
活動エリア：宮城県仙台市
助成年：2012年、2013年、2015年、2016年
助成額：300万円、300万円、300万円、300万円
設立年：2010年
団体概要：宮城学院女子大学で学ぶ仲間が集まって立ち上げる自主的・創造的企画を情報や場といったリソースから支援し、大学と地域社会との連携をサポートする目的で設立。本助成では、遊びや音楽、食といった本学の専門性を活かし、震災により身体的・精神的ストレスを抱えた子どもたちへのケアに取り組む。
URL：http://www.mgu.ac.jp/main/campus/lac/index.html



宮城学院女子大学のキャンパス [写真：団体提供]

市野澤潤平さん

宮城学院女子大学リエゾン・アクション・センター 前センター長

プロジェクトについて

リエゾン・アクション・センターは2010年、机上の学問にとどまらない学生の多様な活動を支援するために設立されました。翌年、震災が起きてからは被災した子どもたちの「日常の再生」をテーマに、石巻市の大原小学校で継続的に学習支援や栄養面でのサポートをしたり、夏休みに県内の子どもたちをキャンパスに招いて「サマーカレッジ」を開催したり、名取市閑上地区の仮設住宅でミニコンサートやお茶会などを開いたりしてきました。

壊れた生活を緊急に立て直す段階を過ぎた今は、「現状をよりよいものにする活動」の中に、まだ日常を取り戻せずに厳しい状況に置かれた方々にも加わっていただく。そのような支援へとシフトしつつあります。

小茄子川京華さん

宮城学院女子大学 教育学部教育学科 児童教育専攻 2年

活動から得た気づき、子どもたちへの願い

参加2年目の2017年は、子どもたちがキャンパス内の遊歩道を散策して感じたことを絵で表現してもらった「森の絵本」を制作しました。遊歩道係のリーダーだった私は、ルート上に「木をさわってみよう」などのミッションを設置したのですが、喜んでくれると思っていた仕掛けに子どもたちは全然反応しなかったり、植物に興味をもってもらおうと作った図鑑も1ヵ月前に完成したせいで葉の様子がすっかり変わっていたり、自分たちの想定とは異なる状況に難しさを感じました。子どもたちの「興味のスイッチ」がどこにあるかは、実際に遊んでみないとわからないことに気づかされました。

私が子どもの頃は、他の地域の子と交流する機会がなく、この年になるまで人見知りや悩んでいたことを思い出して、子どもたちには、他者との間に壁を作らない大人に育ってほしいと願っています。

金澤愛梨さん

宮城学院女子大学 教育学部教育学科 児童教育専攻 2年

参加したきっかけ、ユースだからできたこと

私は将来、子どもと関わる仕事がしたくて「サマーカレッジ」に参加しました。2017年は小学1～6年生まで71人が参加し、私は全体のリーダーを務めました。今年はメンバー集めに苦労し、リーダー全員で休み時間に募集の告知をして回るなどした結果、60人ほどのメンバーを集めることができました。来年度は、映像なども交えて活動の意義を伝え、多くの学生に参加してもらいたいです。

私たちは大人より年齢に近い分、子どもたちとも分かり合える部分が多く、初めは緊張していた子どもたちも2日目には生き生きとしていました。「サマーカレッジ」では何よりも子どもたちの意思や感性を大切にしています。ここで学んだ環境づくりや声かけは、将来の目標である教員になってからも活かせる実感しています。

河野夏実さん

宮城学院女子大学 教育学部教育学科 児童教育専攻 2年

感じた課題と子どもたちの変化

これまで人前になる経験したことはなかったのですが、今回講座係のリーダーに立候補しました。講座係は、大学の教員8人が音楽や英語などの専門分野を小学生にもわかりやすく解説するものなのですが、教員との調整は想像以上に大変でした。その中で、下準備を重ねていたにもかかわらず当日に連絡ミスをしてしまい、事前準備や確認の大切さをあらためて学びました。

一方、嬉しかったことは、食事係がメニュー提案した料理をみんなで食べた際に、1日目は野菜をひと口も食べなかった子どもが、2日目にはほとんど食べてくれたり、話しかけても初めは「うん」としか返事をしなかった子どもが、最後には自分から抱きついてハイタッチを求めてきたりといういろいろな変化を見られたことです。短い時間の中でも子どもたちとの距離が縮まったことを実感し、心地よい達成感を覚えました。



多様なプログラムで子どもたちと交流



子どもたちをキャンパスに招く「小学生のためのサマーカレッジ」



撮影：橋本裕貴

座談会 | 現地NPOのインターンを通じたチャレンジ

9ヶ月間のインターンを通して 若者も受入れ団体も、ともに育つ

インターンシップ奨励プログラムの受入れ団体とインターンの皆さんにお集まりいただき、9ヶ月間のインターン活動から何を学び、どんなことに苦労したのか。またその経験が今、どう活かされているかを語っていただきました。

登壇者 ※[メンター]は、インターンに直接的に関わり指導、相談に応じている。

舘坂千晶さん[未来図書館インターン] (岩手県)

小野寺瑛夏さん[Switch インターン] (宮城県)

大山綾平さん[ふくしまNPOネットワークセンター インターン] (福島県)

司会者

霜田美奈[市民社会創造ファンド プログラムオフィサー]

恒川かおりさん[未来図書館メンター] (岩手県)

今野純太郎さん[Switch メンター] (宮城県)

内山愛美さん[ふくしまNPOネットワークセンター メンター] (福島県)

現場で何を見て 震災をどうとらえるか 頭の整理がしたくて参加

—本日は岩手県、宮城県、福島県からお集まりいただき、ありがとうございます。まずは、インターンに応募したきっかけから教えてください。

小野寺 大学の紹介で知ったSwitchか

ら、プログラムのことを教えてもらいました。宮城県在住ですが被災地のボランティアに参加したことはなく、現場で何を見て、震災をどうとらえるか、頭の整理がしたくて参加しました。

舘坂 岩手県立大学で学生団体「復興girls&boys*」の代表をしていたこともあり、公募ポスターの「東日本再生」、「復興」の文字に惹かれました。たくさんの

人と出会って自分の価値観を広げたいと思い、NPOの仕組みを知りたい気持ちから未来図書館に決めました。

大山 宮城の大学から地元・福島の大学に編入した3年生のときに、母からプログラムのことを聞きました。震災当時は福島市内にいて、ボランティアにも参加しましたが、無力感を感じなかった。もっと知識と経験を身につけたくて応募



恒川さん[未来図書館メンター] (岩手県)

しました。

—受入れ団体の皆さんは、インターンを受け入れるにあたり、どのような印象を持ちましたか。

今野 30代以上の中堅しかいないスタッフの中に若者が入ったことで、私たちも「もっとしっかりしなければ」という意識が芽生えました。

恒川 岩手県内の小中高生のキャリア教育を支援する中で、活動に協力してくれる大学生の発想にはいつも感心させられていましたが、「復興girls&boys*」のメンバーでもある舘坂さんには、沿岸被災地の現状を教えてもらえるかもしれないという期待もありました。

内山 震災の前まで、東北では若い人はボランティアにあまり積極的でない印象がありました。面接で、間伐材を割り箸に活用する活動をしていることを話してくれた大山君からはナイーブで真面目な印象を受けました。

—インターン活動では、どんなことに取り組んだのでしょうか？

小野寺 「若者UPプロジェクト」のパソコン講座や、ストレスをコントロールする講座のサポートに入ったり、利用者さんとコミュニケーションを取ったり、就



舘坂さんの活動の様子[写真：団体提供]

活の講座を企画したりしました。初めは肩に力が入ってしまいましたが、メンターに相談したり、もう一人のインターンと話し合ったり、中間報告会でほかの受入れ団体で頑張っているメンバーの話の聞いたりしながら、自信につなげていきました。

今野 私たちはもともと精神保健分野で活動してきましたが、2013

年は「ユースサポートカレッジ石巻NOTE」という若者支援事業を立ち上げた年で、ばたばたしていました。そんな中でもインターンは柔軟性があって、いろいろなことを吸収してくれました。

舘坂 私は「未来パスポートプログラム」などの手伝いをしました。中でも、沿岸被災地の中高生と熱く語り合う山田町ソントハウスの「かだるプログラム」は企画から運営までらせていただいた初めてのプログラムで、話の組み立てには苦労しましたが、彼らの前向きな発言が刺激になりました。

恒川 建設ラッシュが続いた被災地では、勉強しなくてもお金を稼げると考える中高生が出始めていて、先生から、子どもたちが年齢の近い大学生と語ることで将来について考えるプログラムを作してほしいと依頼を受けていました。「復興girls&boys*」で活動していた舘坂さんは山田町の状況にも詳しく、中高生の頼もしさを感じさせるプログラムに仕上げてくださいました。

大山 僕は現地協力団体*のインターンだったので、ほかの受入れ団体のインターンたちの月次報告書の取りまとめや中間・修了報告会の運営、他団体の取材などをしました。いろいろな情報が入ってくる立場でもあり、福島の現状にも触れることができました。つらい思いをすることもありましたが、そのときの経験も、今の仕事に活かされています。

内山 私たちの団体では、

毎年実施しているインターン合宿の企画もインターンに任せているんです。厳しく何度も企画書を突き返しましたが、根性をもって、最後までやり遂げてくれました。それぞれのNPOにはカラーがありますが、一つに染まることなく、フラットに見る目を養ってほしくて、広く団体さんを取材したり、いろいろなものを直接見たり感じたりしてもらいました。

手応えを確かめながら 経験を重ねられた9ヶ月

—9ヶ月間という長期だからこそ得られたものは何かありましたか？

大山 いろいろな団体さんの活動を知ることで視野が広がったし、福島という複雑な土地だからこそ、物事を客観的に見ることの重要性を感じました。インターンだけではなく、さまざまなことで悩んでいた時期だったので、大学時代の大切な思い出の一つになりました。

舘坂 NPOは非営利だからこそ、物事一つひとつに思いやりをもち、人の思いを理解し、参加者のことを考えてプログラムをつくることの大切さを学びました。次は少しやり方を変えてみようとか、どんどん試せたのも長期プログラムの良さだと思います。

小野寺 9ヶ月の間にいろいろな方の気持ちと遭遇し、価値観や課題、弱さといった自分の新たな一面を知ることができました。皆さんに教えていただかなければ、学生生活の中では決して気づけなかった

※現地協力団体：3県にそれぞれ設置され、現地でのプログラム実施に協力。現地協力団体のインターンは各県のインターンを取りまとめる役割も担う。



舘坂さん[未来図書館インターン] (岩手県)



小野寺さん[Switch インターン] (宮城県)

と思います。

——インターンを受入れることで、団体として得たものはありますか？

恒川 館坂さんの視点が斬新で、大人が忘れていた大事なことを思い出させてくれました。私たちは年間約30校の小中高校に行くのですが、彼女はほぼすべてに参加し、私たちが出せないようなクイズを考えたり、会場設営の際も大人の4倍くらい走り回ったりしてくれました。大学生への伝達方法を考える中で、視覚的なものを採り入れる工夫をするなど、スタッフの伝え方にも改善が見られました。

今野 一緒に働いてみると意外に仕事ができるので、スタッフに緊張感が走りまわりました。私たちがいつも支援している受益者と同じくらいの年齢なので、若者がどこでつまづくのか教えられました。また、インターンの受入れは、団体の人材育成の強化にもつながりました。組織基盤がまだ固まっていない時期にこういう刺激をいただけて、ありがたく思っています。

内山 NPOを支援する“中間支援”を理解するのは難しいことです。福島には放射能という見えないものの被災者を支援している団体もあるので、なおさら難しかったと思います。若い人に教えることで逆に学ばされることも、たくさんあり



小野寺さんの活動の様子(写真:団体提供)

ました。インターンを受け入れるようになってから、団体でも新卒者を採用するようになり、今では新卒の子たちをインターンのように指導しています。

——今だから話せる、つらいこともありましたか？

館坂 小中高生と話そうときは伝える難しさを感じましたが、手応えを確かめながら経験を重ねられたことで解決につながりました。お昼を食べながらスタッフの皆さんに愚痴を聞いてもらったこともあり、自分を理解してくれる人がある安心感がありました。

小野寺 受益者を思うがゆえにヒントを出しすぎたり、価値観を押しつけてしてしまうこともありました。そこが壁となって、なかなか自信がもてませんでした。メンターやスタッフに相談して、自分が手伝えることはほんの一部なんだと意識するようになりました。泣きそうになったことは何度もありましたが、インターンをやめようとは思いませんでした。

大山 いまだに解消できていない悩みもありますが、人の役に立ちたいという思いは常にあります。今の仕事も福島と関係しているので、本当にこれでいいのかと自問を繰り返しています。何がどうなれば解決なのかわからないながらも、区切りをつけて、物事をまとめることの大切さを学びました。

——インターンを受入れるにあたって、団体としてのご苦労もありましたか？

恒川 インターンを開始した初期の頃は、長く席を離れたりと、ずっとおしゃべりしたりなど、いろいろなインターンがいて対応に悩みました。そこでオリエンテーションをすることで、この状況を回避するなど、経験を重ねながら手探りで学んでいきました。館坂さんの頃にはインターンとの距離感がつかめるよう

になって、スムーズに進めることができました。

今野 つい手を差し伸べすぎてしまうようなので、意識して出さないように努力しました。メールやLINEのやり取りが途絶え、コミュニケーションがうまくいかなかったこともあります。新入社員を受入れる際の勉強にもなりました。

内山 悩みを口に出せる人もいれば、出せない人もいて、そのインターンのことがわかるまではサポートもしづらかったけれど、それができるようになると私自身も成長したのを感じました。この何年かインターンを受入れた中で、常に体温を感じられる距離にいないと、お互いのことはなかなか理解できないものだと気づかされました。

職場でただ一人の、福島出身ということでインターンの経験が活かされていると感じる日々

——活動の経験をこれから、どう活かしていきたいですか？

小野寺 当時は進路にも悩んでいたもので、活動を通して自分のことを知り、自信をつけることができました。Switchに就職するというご縁までいただき、仕事をしていて楽しいと思える瞬間があるのもこのプログラムのおかげです。同期のインターン仲間とは現場で会うことも多く、今もつながっています。前年度から私もメンターとしてインターンに関わっていますが、プログラムのことを思い出した際に初心に帰ることができます。被災した子どもたちが社会人になり、就職の悩みを抱える、これからの本番だと感



今野さん[Switch メンター] (宮城県)



内山さん[ふくしまNPOネットワークセンター メンター] (福島県)

じています。ほかの団体とも連携し、縁を太くしながら石巻全体を盛り上げていきたいと思っています。

大山 私は災害廃棄物処理などを担う環境系の企業に就職して3年目になるうとしています。近々、福島に関わる仕事を担当することになりました。職場でただ一人の、福島出身の人間ということもあり、情報を求められることも多々あります。そんなときに答えられるのもインターンの経験があったからこそで、日々、活動が活かされていることを感じています。

館坂 インターンが終わってすぐに就職活動が始まり、岩手県内で就職が決まりました。インターン中は自分自身を振り返り、どんな働き方がしたいのかを考える機会がたくさんあったので、就活にも活かすことができました。活動中、非営利であることに魅力を感じたので、非営利の考え方を生かして、なおかつ復興支

援にも貢献している企業を選びました。仕事でもプライベートでも、復興支援の現場には、これからもどんどん入っていきたいです。

——受入れ団体の皆さんにとって、プログラムはどんな存在でしたか？

恒川 岩手、宮城、福島で取り組み、3県のインターン同士が合同で合宿に参加したり、中間や修了報告会もあつたりと学生の学びを深める、とても魅力の詰まったプログラムだと思いました。今後も岩手の復興を支える若者が活躍できる場を創出していきたいと考えています。

今野 このプログラムとは開始当初から関わってきましたが、私たちの組織基盤がまだ脆弱な時期に、宮城県内のほかの受入れ団体さんと悩みを共有しながら進めていけたのは、ありがたいことでした。最初に関わった学生がちょうど社会に出て、成果を出し始める時期です。若い力が次世代を引っ張って、もっともっといろいろなことにチャレンジをして暴れてほしいと思います。

内山 ひと言で言えば、ぜいたくな時間でした。復興



大山さんの活動の様子(写真:団体提供)

するにあたって一番大事なものが人材育成です。メンター会議では、「復興と人材育成」というテーマで話し合い、私たち世代の人づくりにも役立ちました。スタッフとして成長するには受け身ではなく、自発的に動かなければなりません。そこを若い人たちにどう求めていくかが、これからの課題でもあります。

——今だからこそ見えてきたインターンシップ奨励プログラムの魅力も含めてお話しいただきました。皆様、ありがとうございました。



大山さん[ふくしまNPOネットワークセンター インターン] (福島県)

団体プロフィール

特定非営利活動法人未来図書館 [2014年～2016年受入れ]

活動: 変化の激しい社会の中で、たとえば自分が働いている会社が倒産したとしても自分の人生を崩さず生きていく力を育むために、子どもと社会をつなぐことをミッションとし、一人ひとりが自分らしく幸せに生きていく社会の実現を目指す。岩手県内の小中高校の授業で、多様な生き方や価値観をもつ複数の大人とグループに分かれた子どもたちが学び合う「未来パスポート」プログラムや、設定したテーマについて語り合う「かだる」プログラムなどを展開している。

設立: 2004年

所在地: 岩手県盛岡市肴町4-20 永卯ビル3階

URL: <http://www.miraitoshokan.com/>

認定特定非営利活動法人 Switch [2012年～2016年受入れ]

活動: 広く精神保健分野での啓発・支援活動を行う。未来ある若者が将来に希望をもち、地域で安心して生活していくことができるように「学ぶ・働く」という観点から、多様性を認め合う社会に向けて、さまざまな提言や発信をしている。高等教育機関対象者の修学(就学)から就労支援までのワンストップサポート、精神障害者の就労支援、メンタルヘルス研修(教育機関・企業・福祉その他)、休職中・休学中の方への復職・復学支援などを行っている。

設立: 2011年

所在地: 宮城県仙台市宮城野区榴岡1-6-3 東口鳳月ビル602

URL: <https://switch-sendai.org/>

認定特定非営利活動法人 ふくしまNPOネットワークセンター [2013年～2016年受入れ]

活動: 主に福島県内の市民活動団体・非営利活動団体・個人の公益的活動をサポート。マネジメント支援、地域交流や人材交流を活かすに行い、それらの交流を支援し、市民・行政・企業とのネットワークづくりを行う。21世紀の新しい市民社会を築くために各種自主企画を展開。市民社会をつなぐ身近な情報発信、NPO・市民活動の環境整備や相談事業、機能強化と連携、講座の開催、調査研究などを行っている。

設立: 2000年

所在地: 福島市太田町12-30 マルベリービル6F

URL: <http://f-npo.jp/>

ユースへのエール

助成プログラムの選考委員には、選考以外に各種イベントにも積極的に参加いただきました。5年間、復興過程におけるユースのチャレンジとは何かを共に考え、応援して下さった委員6名からのエールをお届けします。

1

【選考委員長】
実吉 威氏

認定特定非営利活動法人
市民活動センター神戸
理事・事務局長



5年間を振り返って、多くの、そして多様な「チャレンジ」を応援してきたことに改めて驚きます。「ユースの育成」を主目的の1つに掲げたこのプログラムですが、その成果は短期で現れるものばかりではありません。皆さんの事業がうまくいってもいなくても、そこで得られた経験はきっと貴重な糧になり、皆さんの成長のために大きく役立つに違いないと思います。また、皆さんが得た経験や学びは、また次の誰かにとっても価値のあるものでしょう。ぜひ次の世代にも伝えていってください。このような素晴らしいプログラムの一端に関われたことを幸せに感じています。被災地で、あるいはまた別の場所で、皆さんと再会できるのを楽しみにしています。

2

【選考委員】
赤澤清孝氏

特定非営利活動法人
ユースビジョン
代表



5年間お疲れ様でした。プログラム開始時は、先達としてユースの皆さんの心意気を後押ししようという気持ちでしたが、年を追う毎に、地域との信頼関係を築き、地域の未来を創造する主体として、パートナーとして活動する姿から、こちらが多くの学びや刺激をもらいました。団体の中には、思い通りに活動が進まず、志半ばで終了を余儀なくされたケースもあったでしょう。しかし、ユースが、何に悩み、苦労したのかという経験談は、今後、同様の活動を志すユースたちにもきっと役に立つはずで。そして、活動したユースの皆さんにも、成功、失敗を糧に、今後それぞれのフィールドでの活躍を期待しています。

3

【選考委員】
岩附由香氏

認定特定非営利活動法人
ACE
代表



社会課題に対し、関わりたい気持ち、アイデア、仲間もあるけど、資金はない。そんな若者の被災地支援を応援するこのプログラムは、その着眼点のユニークさとフォローアップ体制の素晴らしさにより多くの若者がその力を発揮し、被災された方々のくらしの再生に貢献しました。選考や中間報告で多くの若者の創発と気概に出会い、活動初期に助成金に助けられた数十年前の自分とも重ねながら、助成の社会的意義を改めて実感させられ、学ばせていただいたプログラムでした。

4

【選考委員】
鹿住貴之氏

認定特定非営利活動法人
JUON (樹恩) NETWORK
理事・事務局長



阪神淡路大震災の当時、私は大学生。知的障害児と遊ぶサークルに所属し、東京の学生ボランティアのネットワークでも活動していましたが、被災地では障害者を支える活動に参加しました。短い期間でしたが、自立生活運動と出会うなど、大きな影響を受けました。JUON NETWORKは、農山漁村と都市を結ぶ活動をしており、設立のきっかけは、阪神淡路大震災です。大学生協が被災学生のために仮設学生寮を建設した際、徳島県の林業関係者から間伐材のミニハウスを提供いただいた縁から生まれました。東日本大震災の活動を行ったユースのみなさんが、そこから生まれたつながり、経験、縁などを、形を変えたとしても、未来に活かしていくことを願っています。

5

【選考委員】
西山志保氏

立教大学
社会学部
教授



本プログラムへの参加を通して、東日本大震災後の復興という深刻な問題に対し、多くのユースが自ら課題を発見し、ユニークな発想によって解決方法を模索しながら、組織をマネジメントする「主体性」のプロセスがみられたことは大変喜ばしいことでした。それだけでなく、同じ志を共有する仲間と情報交換したり、被災地内外のユースのネットワーク化が促進されるなど、ユース同士の「つながり」も多く生み出されました。このように「主体性」と「つながり」という大きな成果を得た皆さんは、これからの日本社会を担い導いていくリーダーとして、自信をもって飛躍してほしいと思います。

6

【選考委員】
仁平典宏氏

東京大学大学院教育学研究科
比較教育社会学コース
准教授



かつて「ユース」だった方へ。●市民活動を仕事に選んだ皆様。食べていくのは大変ですよね。資金獲得への不安、安定しない収入、やりがい搾取…。ゆるふわ言葉だけに身を委ねず、活動の中でしっかりした専門性と経験を身につけ、自分を強かに守る砦にしてください。未来の希望は皆さんから生まれると信じてます。●「普通」の仕事を選んだ皆様。活動を止めてしまった人もいます。仕事が忙しく時間もないし、中途半端な気持ちで関わってはいけないと思います。でもたとえ少しでも関心を持ち続けることは、良い未来を創る上で重要だと思います。ぜひ中途半端さに開き直ってください。●本プログラムの経験が皆様の人生の糧となりますように！

データ編

活動・研究助成

- ＞ 助成対象団体の都道府県別件数と分布
 - ＞ 助成対象一覧(2012～2016年)
 - ＞ 応募状況/助成状況の5年間の推移
 - ＞ 助成の流れ
 - ＞ 応募要項
- インターンシップ奨励プログラム
- ＞ インターン受入れ団体と人数
 - ＞ インターンシップ9ヶ月の歩み
 - ＞ 応募要項



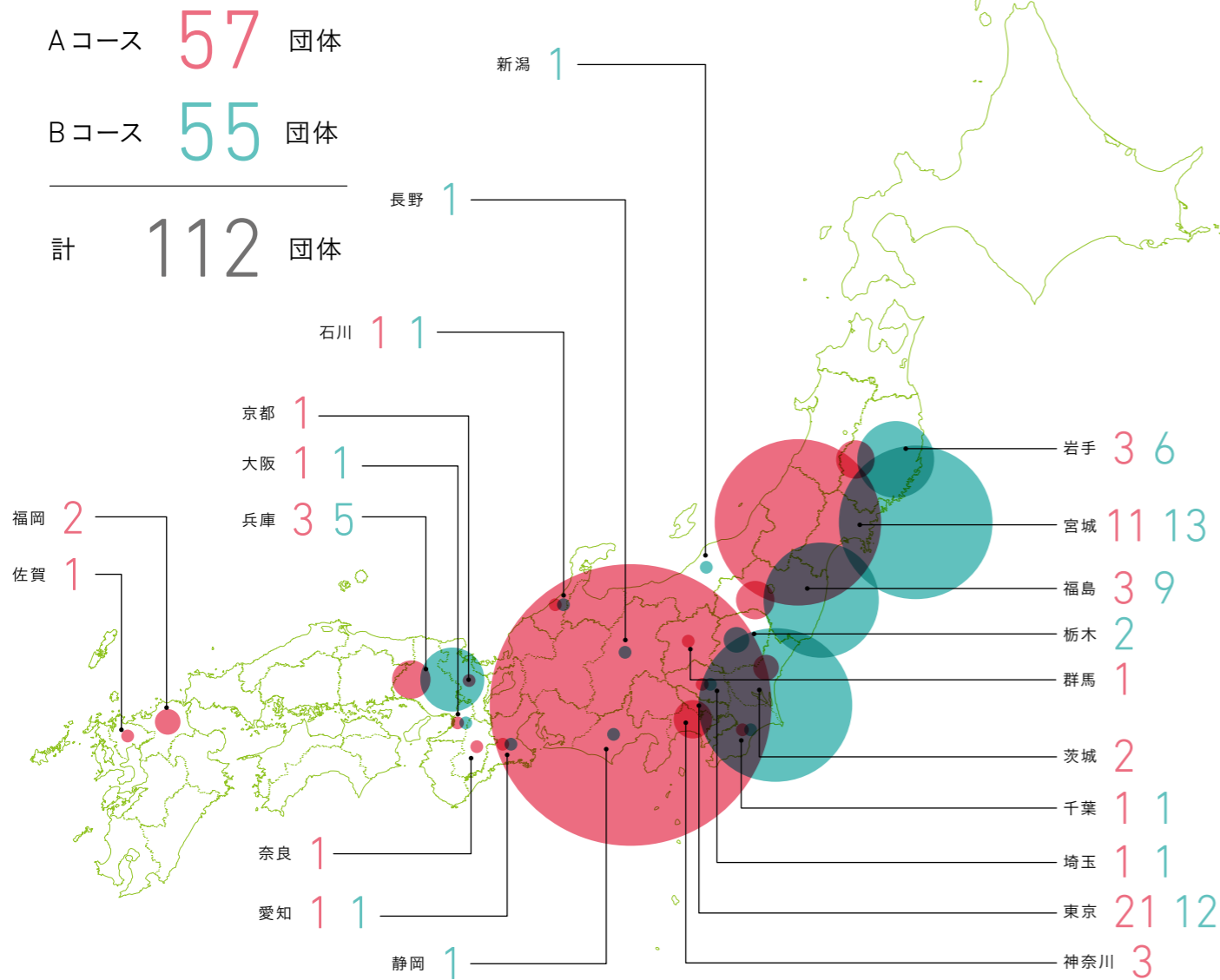
活動・研究助成

本プログラムでは2012年から2016年の5年間で、Aコースは延べ117件(実数57団体)・5,554万円。Bコースは延べ95件(実数55団体)・2億5,919万円、計212件(実数112団体)・3億1,473万円の助成を行いました。

Aコース：ユースが任意のチーム/サークル/グループで取り組む活動や研究(10万円以上50万円まで)

Bコース：NPO/大学(院)等の組織においてユースが主体的に取り組む活動や研究(50万円以上300万円まで)

助成対象団体の都道府県別件数と分布



助成対象一覧(2012~2016年)

助成対象一覧 2012

Aコース					22件	合計1,057万円
NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者名	所在地	助成額
1	活動	ふれあいサロンプロジェクト	尚網学院大学	鹿又 さやか	宮城県	48万円
2	活動	東松島農業再生プロジェクト	学生による地域支援活動団体 みまもり隊	木村 彩香	宮城県	49万円
3	活動	繋がる被災地支援プロジェクト	Team Tama Action Project	大友 将矢	宮城県	50万円
4	活動	Nsプロジェクト〜ありのままの笑顔〜	大夢's	佐藤 真紀	宮城県	50万円
5	活動	宮城県仮設住宅入居者支援プロジェクト	東北学院大学災害ボランティアステーション 学生スタッフ	菊地 崇史	宮城県	40万円
6	活動	避難先地域・つくば市における被災者のためのコミュニティ形成支援	Tsukuba for 3.11	水落 裕樹	茨城県	50万円
7	活動	ふくしまキッズ・スマイルアゲイン	福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト茨城チームJr.	勝俣 義之	茨城県	28万円
8	活動	学生による被災地支援のための市民メディアプロジェクト	学生による被災地支援のための市民メディアプロジェクト	石原 夏果	東京都	50万円
9	研究	陸前高田市広田半島きらめきプロジェクト	陸前高田市広田半島きらめきプロジェクト	徳永 由弥	東京都	46万円
10	活動	石巻市雄勝町 復興支援プロジェクト	ラスト・ワン・マイル・プロジェクト	鈴木 邦和	東京都	50万円
11	活動	遠野・被災地支援ボランティア活動	法政大学市ヶ谷キャンパス「チーム・オレンジ」	高坂 宣雄	東京都	50万円
12	活動	和光大学 気仙沼・大島支援プロジェクト	和光大学 気仙沼・大島支援プロジェクト	齋藤 武	東京都	50万円
13	研究	南相馬市ふるさと復興会議「ざくばらんに話さすべ!」応援プロジェクト	東京農工大学水資源計画学研究室「被災地応援隊」	林 文雄	東京都	50万円
14	活動	大沢地区復興まちづくり ワークショップ	気仙沼みらい計画大沢チーム ユース	田辺 紀博	東京都	50万円
15	活動	頑張り東北Project	きずなInternational	YEONHO SEO	東京都	50万円
16	研究	松島海岸公園再生プロジェクトの支援 〜観光地における景観と防災・減災に配慮した新しい公園デザインを目指して〜	早稲田大学社会科学部「都市・コミュニティデザインゼミ」松島支援チーム	志村 光一	東京都	47万円
17	活動	「新生!! 田老」	成蹊高校元3・F有志	渡辺 悠太	東京都	50万円
18	研究	三陸水産業・漁村・漁港復興に向けた産学官連携支援プロジェクト	東京大学大学院 番屋プロジェクトグループ	川口 達也	東京都	49万円
19	活動	中央大学学生による宮城県、福島県、岩手県を対象とした震災復興支援プロジェクト	中央大学FLD国際協力プログラム崎坂ゼミ	崎坂 香屋子	東京都	50万円
20	活動	東大ー東北復興エイド	東大ー東北復興エイド	平井 良樹	東京都	50万円
21	活動	ACTION ~ students' project for 3.11 ~	ACTION	神田 大樹	大阪府	50万円
22	活動	大船渡支援ワークキャンププロジェクト	神戸大学大船渡支援プロジェクト実行委員会	東 雄大	兵庫県	50万円

Bコース					12件	合計2,949万円
NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者名	所在地	助成額
1	活動	小中高生の夢を育む山田町学習支援	一般社団法人SAVE IWATE	寺井 良夫	岩手県	300万円
2	活動	大館町こども議会設立運営プロジェクト	一般社団法人おらが大館夢広場	阿部 敬一	岩手県	284万円
3	活動	宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク	宮城学院女子大学リエゾン・アクション・センター	市野澤 潤平	宮城県	300万円
4	活動	石巻観光復興ユースチャレンジ事業	特定非営利活動法人DoTankみやぎ地域政策研究行動会議	遠藤 学	宮城県	300万円
5	活動	TEENS Global Cafe in Tohoku	特定非営利活動法人キッズドア	渡邊 由美子	宮城県	150万円
6	活動	思春期ピアカウンセラーによる被災県若者ピアキャラバン・プロジェクト	日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会	高村 寿子	福島県	207万円
7	活動	コミュニティスペースからの復興人材育成事業	ソーシャルネットワークカフェびなっつ	岩崎 大樹	福島県	261万円
8	研究	「ひと・つながる」復興支援調査・交流推進プロジェクト	特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ	古山 郁	福島県	298万円
9	活動	被災地の仕事づくりを加速させる 若者の力による復興支援グッズの販路拡大と新製品の開発プロジェクト	特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク	岩井 俊宗	栃木県	297万円
10	活動	Do for Smile@東日本プロジェクト「明学・大館町吉里吉里復興支援プログラム」	明治学院大学ボランティアセンター	原田 勝広	東京都	202万円
11	活動	震災を経験した東北・関西の大学生による岩手県釜石市のコミュニティ活性化支援プロジェクト	一般財団法人ダイバーシティ研究所	田村 太郎	東京都	150万円
12	研究	ニーズマッチプロジェクト〜愛知県15大学の大学生による福島っ子支援のあり方調査〜	東日本大震災復興支援団体 愛チカラ	石原 杏莉	愛知県	200万円

※団体名および代表者名は、助成決定時のもの。

助成対象一覧 2015

Aコース 29件 合計1,382万円

NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者氏名	所在地	助成額
1	活動	吹奏楽サークル活動2015	岩手医科大学 吹奏楽サークル	井筒 智成	岩手県	48万円
2	活動	HARU足湯プロジェクト	東北大学地域復興プロジェクト" HARU"	安部 汐里	宮城県	50万円
3	活動	子ども・高齢者・学生を繋ぐ憩いの場 留まり木プロジェクト	支援サークル ひだまり	宗像 遼	宮城県	50万円
4	活動	Link Hearts Project	石巻専修大学 山崎ゼミナール	畠山 美穂	宮城県	50万円
5	活動	宮城県仮設住宅入居者支援プロジェクト	東北学院大学災害ボランティアステーション 学生スタッフ	羽賀 慧	宮城県	50万円
6	活動	宮城県名取市の仮設住宅における支援活動～新しい環境へ向けてのコミュニティ形成を応援するプロジェクト～	尚綱学院大学ボランティアチームTASKI (たすき)	庄司 晴香	宮城県	50万円
7	活動	よつばファーム みんなで作ろう!東松島地野菜プロジェクト	学生による地域支援活動団体 みまもり隊	佐藤 仁	宮城県	49万円
8	活動	福島を感じて考えるスタディーツアー「スタ☆ふく」	スタ☆ふくプロジェクト	羽賀 さやか	福島県	50万円
9	活動	仮設住宅支援	(学生団体) 福島大学災害ボランティアセンター	菅野 勇希	福島県	43万円
10	活動	つくば市における避難者・学生・市民のためのコミュニティ形成支援	Tsukuba for 3.11	霜島 太一	茨城県	50万円
11	活動	東北を元気に!—石巻市牡鹿半島で行う漁業支援及び仮設住宅支援—	石巻応援団「おしか」	田中 愛生	埼玉県	34万円
12	活動	被災地を花と緑で支援するプロジェクト	千葉大学園芸学部 松戸・柏の葉地区環境ISO学生委員会	濱田 裕司	千葉県	50万円
13	活動	遠野・被災地自立支援ボランティア	法政大学市ヶ谷キャンパス「チームオレンジ」	辻道 大塚	東京都	50万円
14	活動	東日本大震災復興支援プロジェクト～東北の受験生に参考書を～	学生団体 参考書宅配便	嶋村 千尋	東京都	50万円
15	活動	田老×成蹊	成蹊高等学校生徒会 東北震災復興パート	山崎 衣里子	東京都	32万円
16	活動	県外避難した福島の子どものための学習支援プロジェクト	Gooce	花山 一心	東京都	50万円
17	活動	久之浜・大久地区 文化アーカイブ	久之浜大久地区まちづくりサポートチーム青年部	濱中 峻	東京都	50万円
18	活動	中央大学学習支援「子ども面瀬学2.0」	中央大学 被災地支援学生団体「面瀬学習支援」	宮崎 汐里	東京都	50万円
19	活動	繋がろう!被災地支援プロジェクト	Team Tama Action Project	森田 記匡	東京都	50万円
20	活動	さんさんつながりプロジェクト	きずなInternational	白似田 真生	東京都	50万円
21	活動	気仙沼チーム —気仙沼と人をつなぐ—	早稲田大学気仙沼チーム	三木 利隆	東京都	50万円
22	活動	市民メディア活動を通して被災地の今を伝えるプロジェクト	学生による被災地支援のための市民メディアプロジェクト	西 樹利香	東京都	50万円
23	活動	浜通り魅力発信プロジェクト	ふたばYOUTH	渡邊 郁也	神奈川県	43万円
24	活動	変わらぬ支援を —広田寄り添いプロジェクト—	金沢大学ボランティアさぼーとステーション	中村 優衣	石川県	50万円
25	活動	石巻市内の仮設住宅に住む子どもたちに対する保育を通してのボランティア活動	みんなに笑顔をとどけ隊	伊藤 麻由希	愛知県	50万円
26	活動	気仙沼大島の魅力を島の子ども達と一緒に伝えるかわらばんワークショップ	ACTION—students' project for 3.11—	神田 大樹	大阪府	48万円
27	活動	雄勝町のまちの活性化を図るための支援活動	Small sunlight	高岸 明以	兵庫県	50万円
28	活動	架け橋プロジェクト～食で東北と九州を繋げるったい～	東日本災害ボランティア派遣隊	神寄 暢久	福岡県	50万円
29	活動	このゆびとまれ!	このゆび	山本 明日香	福岡県	35万円

Bコース【新規助成】 11件 合計2,807万円

NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者氏名	所在地	助成額
1	活動	宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク	宮城学院女子大学 リエゾン・アクション・センター (MG-LAC)	市野澤 潤平	宮城県	300万円
2	活動	いしのまき学校 高校生ゼミ	一般社団法人ISHINOMAKI2.0	松村 豪太	宮城県	300万円
3	活動	古民家再生「雀のお宿(仮)」プロジェクト	特定非営利活動法人蓮実庵くらしの学校	渡辺 仁子	福島県	300万円
4	活動	被災地の「今」を伝える 相想(そうそう)スマイルプロジェクト	特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ	古山 郁	福島県	294万円
5	活動	東日本大震災復興支援プロジェクト2015～変化する現地の支援ニーズに応じたユースチャレンジ事業	立教大学コミュニティ福祉学部 東日本大震災復興支援推進室	森本 佳樹	埼玉県	300万円
6	活動	復興支援カフェ ～被災地と東京をつなぐ学生たちの取り組み～	桜美林大学 基盤教育院サービス・ラーニング・センター (SLC)	牧田 東一	東京都	112万円
7	活動	「高校生を対象とする気仙沼フードマイスター講座」 気仙沼の水産加工品の定期購買を通じたマーケティング人材育成	一般社団法人気仙沼仕事創出プロジェクト	茂木 正光	東京都	98万円
8	研究	陸前高田市高齢者応援プロジェクト～住まいと住まい方の提案～	建築計画学復興デザインチーム	川上 咲久也	東京都	295万円
9	活動	大島のみらいを考える会	気仙沼大島みらいチーム	寺内 美紀子	長野県	208万円
10	活動	専門高校のネットワークで新たな石巻ブランド創出に挑戦	特定非営利活動法人グラウンドワーク三島	小松 幸子	静岡県	300万円
11	活動	災害支援活動を行ったソーシャルワーカーの“声”の発信を通じた未来のソーシャルワーカー・ネットワークづくり	関西福祉科学大学 東日本大震災復興支援ユースチーム	遠藤 洋二	大阪府	300万円

Bコース【継続助成】 11件 合計3,259万円

NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者名	所在地	助成額
1	活動	陸前高田の子どもを対象とした居場所づくり「みちくさルーム」への学生ボランティア受け入れ(2)	特定非営利活動法人バト	水野 朝紀	岩手県	300万円
2	活動	宮古地区において活動的なユースがつながるコミュニティの持続的な形成	ユースみやっこベース	早川 輝	岩手県	260万円
3	活動	若林区東部振興プロジェクト	一般社団法人 ReRoots	広瀬 剛史	宮城県	300万円
4	活動	宮城県石巻市における学びを通じた居場所作りプロジェクト	特定非営利活動法人 TEDIC	門馬 優	宮城県	300万円
5	活動	学生・住民協働で被災3県の地域コミュニティ形成を図るボランティアツアー	東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室	花輪 公雄	宮城県	300万円
6	活動	大学生ボランティアによる被災児童・生徒の自立支援プロジェクト(2)	公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン	今井 悠介	宮城県	300万円
7	活動	大学生による福島の食と農の再生支援プロジェクト(2)	福島大学うつくしまふくしま未来支援センター	中田 スウラ	福島県	300万円
8	活動	若者の力による海岸林再生と、活動を通じたコミュニティづくり事業	特定非営利活動法人トチギ環境未来基地	塚本 竜也	栃木県	300万円
9	活動	海の照葉樹林とコミュニティづくり支援プログラム(2)	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)	村上 公一	東京都	300万円
10	活動	宮城県気仙沼市大沢地区における復興まちづくり支援～復興から地域活性化／住民主体のまちづくりへ	気仙沼みらい計画大沢チーム	鈴木 伸治	兵庫県	299万円
11	活動	建築学生による「記憶の街」復元模型ワークショップ開催を通じた福島県・東日本大震災被災地における記憶の保存・再生プロジェクト	「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会	槻橋 修	兵庫県	300万円

助成対象一覧 2016

Aコース 18件 合計894万円

NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者名	所在地	助成額
1	活動	東松島地野菜プロジェクト	学生による地域支援活動団体 みまもり隊	菅 京子	宮城県	50万円
2	活動	学生が住民に寄り添い福島の復興を支援するボランティアツアー	東北大学 復興youth	中澤 恵	宮城県	50万円
3	活動	「子ども・高齢者・学生を繋ぐ憩いの場 留まり木プロジェクト」	支援サークル ひだまり	宗像 遼	宮城県	44万円
4	活動	宮城県仮設・公営住宅・漁業支援プロジェクト	東北学院大学災害ボランティアステーション 学生スタッフ	本間 一輝	宮城県	50万円
5	活動	林業・限界集落・内陸移転先に若者が関わりつくる持続可能な雄勝町	東北大学インストーンス	名古屋 円花	宮城県	50万円
6	活動	陸前高田市のコミュニティ再生と再編成に寄り添う地域活動の展開	東北大学陸前高田応援サークル ぼかぼか	今本 亘	宮城県	50万円
7	活動	福島を感じて考えるスタディーツアー「スタ☆ふく」	スタ☆ふくプロジェクト	菊地 実咲	福島県	50万円
8	活動	つくば市における避難者・学生・市民のためのコミュニティ形成支援	Tsukuba for 3.11	野中 駿宏	茨城県	50万円
9	活動	被災地を花と緑で支援するプロジェクト	千葉大学園芸学部 松戸・柏の葉地区環境ISO学生委員会	三宅 由惟	千葉県	50万円
10	活動	宮城県被災地ボランティア～気仙沼でつながらNIGHT～	法政大学多摩ボランティアセンター「チーム気仙沼つながら騎士(ナイト)」	武藤 花緒理	東京都	50万円
11	活動	箱崎漁業再生プロジェクト	RINC	山下 亮	東京都	50万円
12	活動	中央大学学習支援「子ども面瀬学」	中央大学 被災地支援学生団体「面瀬学習支援」	宮崎 汐里	東京都	50万円
13	活動	未来に向け変化する気仙沼に寄り添い続ける	早稲田大学気仙沼チーム	川澤 結以	神奈川県	50万円
14	活動	県外避難した福島の子どもたちの学習支援プロジェクト	Gooce	石澤 峻太	神奈川県	50万円
15	活動	変わらぬ支援を - 広田寄り添いプロジェクト -	金沢大学ボランティアさぼーとステーション	増本 匡史	石川県	50万円
16	活動	石巻市内の仮設住宅に住む子どもたちに対する保育を通してのボランティア活動	みんなに笑顔をとどけ隊	松本 智葉	愛知県	50万円
17	活動	のど暮らし応援交流ツアー	大阪大学災害ボランティアサークルすずらん	長山 広太郎	兵庫県	50万円
18	活動	繋プロジェクト ～宮城の食文化を九州に～	宮城-福岡 架け橋隊	岸田 拓海	佐賀県	50万円

Bコース【新規助成】 6件 合計1,710万円

NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者名	所在地	助成額
1	活動	宮城県名取市被災者支援活動 尚綱学院大学～名取復興音楽祭を通じたコミュニティ形成プロジェクト～	尚綱学院大学エクステンションセンター	片山 一男	宮城県	300万円
2	活動	気仙沼・南三陸町における自らの問題意識に対し主体的に行動を起こす子どもの育成	特定非営利活動法人底上げ	矢部 寛明	宮城県	259万円
3	活動	高校生と住民協働による「小高のにぎわい再生」プロジェクト	特定非営利活動法人つながっぺ南相馬	今野 由喜	福島県	300万円
4	活動	若者がプロデュース作り手と買い手をつなげるオーダーメイド商品とコミュニティ	特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク	岩井 俊宗	栃木県	300万円
5	研究	若者から見た持続可能なまちづくりのためのワークショップと長期化する仮設住宅の暮らし実態調査プロジェクト	陸前高田地域再生支援研究プロジェクト	宮城 孝	東京都	252万円
6	活動	宮城県仙台市の困窮家庭の中学3年生および高校生を対象とした無料学習会	特定非営利活動法人キッズア	渡辺 由美子	東京都	299万円

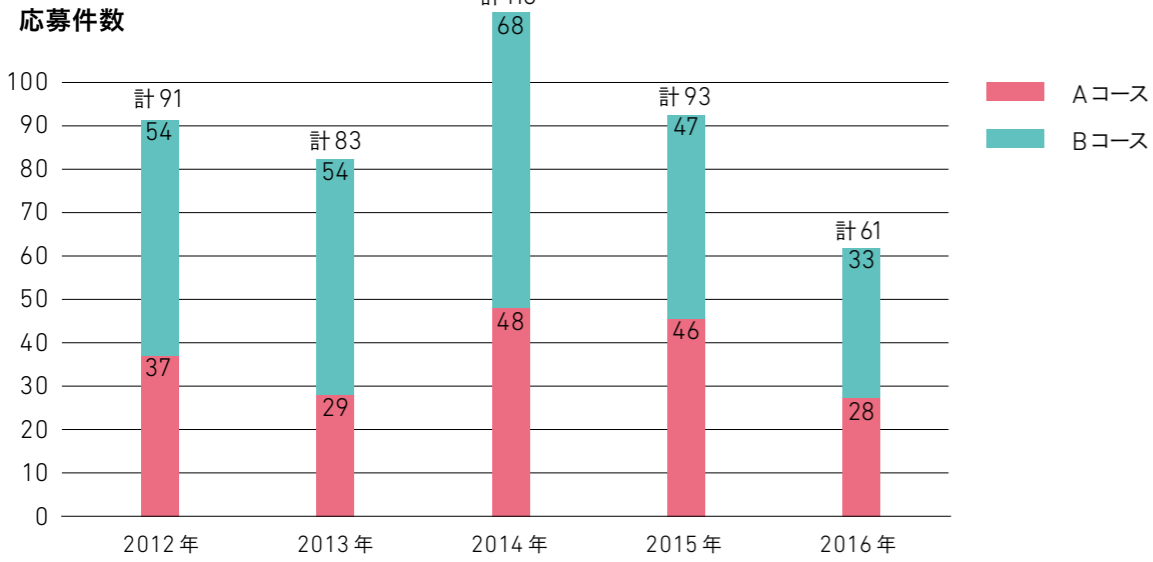
Bコース【継続助成】 6件 合計1,798万円

NO	種別	プロジェクト名	団体名	代表者名	所在地	助成額
1	活動	宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク2016	宮城学院女子大学リエゾン・アクション・センター (MG-LAC)	木口 寛久	宮城県	300万円
2	研究	いしのまき学校 ～街と未来を切り開く～	一般社団法人ISHINOMAKI2.0	松村 豪太	宮城県	300万円
3	活動	若者たちで明日の福島をつなぐプロジェクト	特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ	古山 郁	福島県	298万円
4	活動	東日本大震災復興支援プロジェクト2016～コミュニティ支援に特化したユースチャレンジ事業～	立教大学コミュニティ福祉学部 東日本大震災復興支援推進室	湯澤 直美	埼玉県	300万円
5	活動	専門高校と地元企業との連携による新たな石巻オリジナルスイーツの創出に挑戦	特定非営利活動法人グラウンドワーク三島	小松 幸子	静岡県	300万円
6	活動	災害支援活動を行ったソーシャルワーカーの“声”の発信を通じた未来のソーシャルワーカー・ネットワークづくり	関西福祉科学大学 東日本大震災復興支援ユースチーム	遠藤 洋二	大阪府	300万円

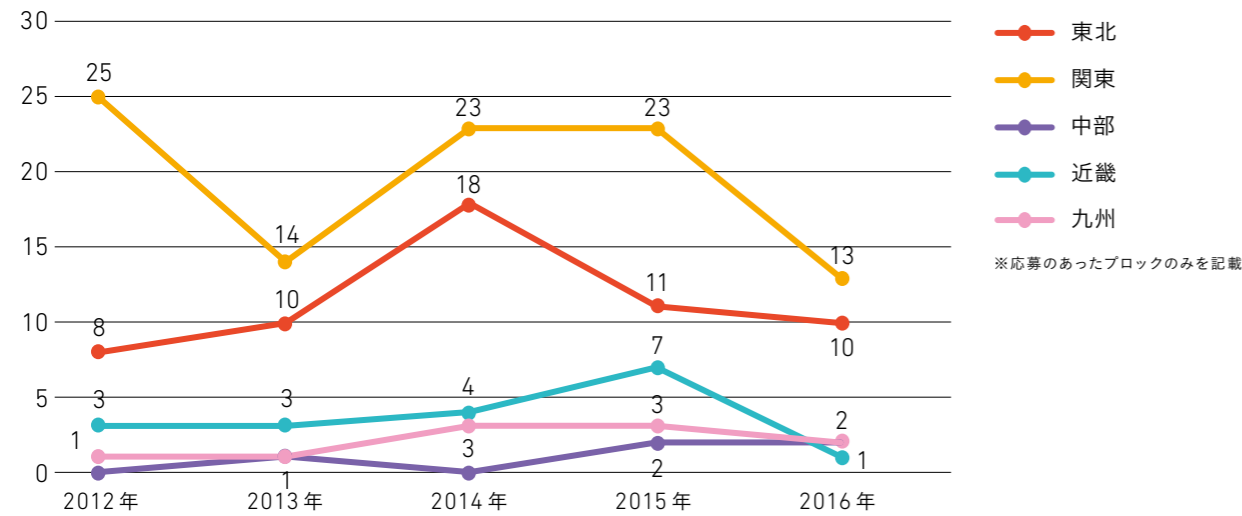
応募状況／助成状況の5年間の推移

※「Bコース」の2012年の新規助成のみ、2013年より継続助成を含む。

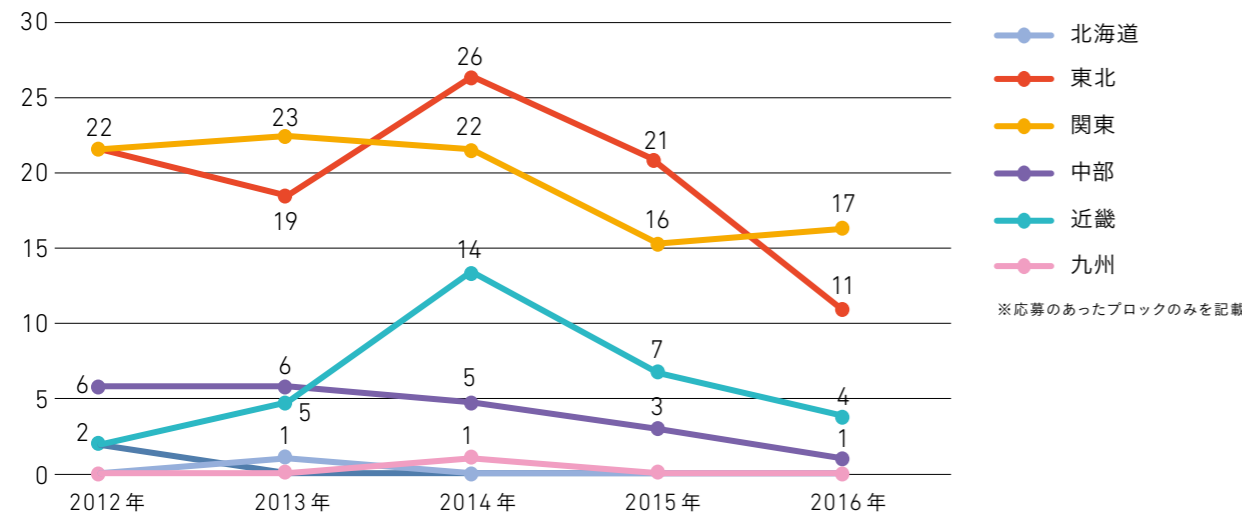
【応募状況】



Aコース 地域ブロック別の応募状況

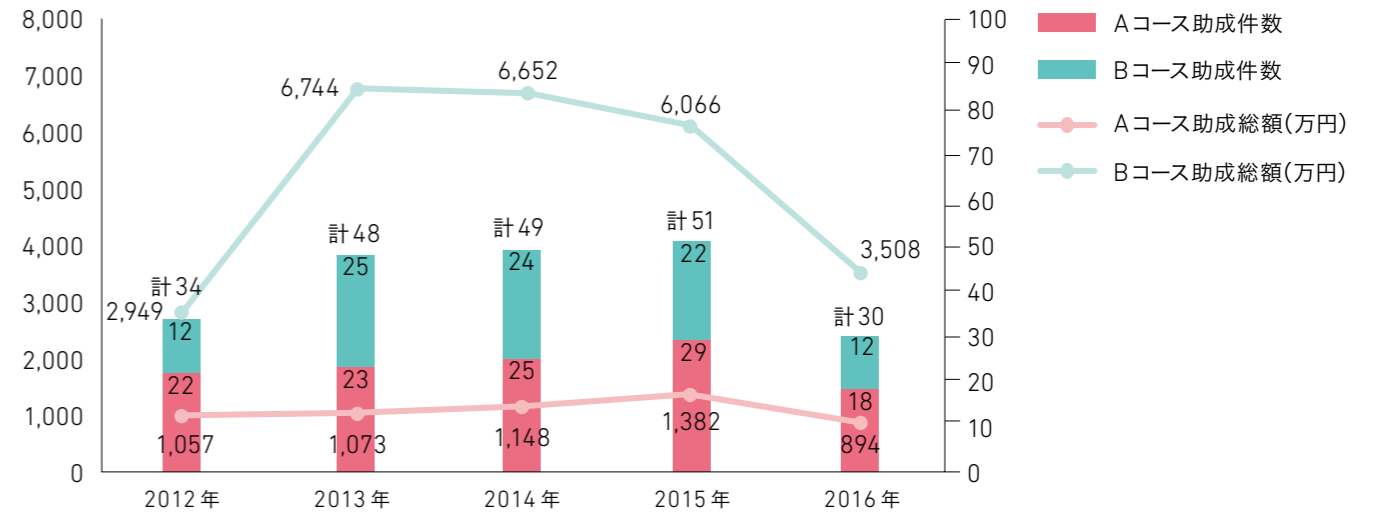


Bコース 地域ブロック別の応募状況

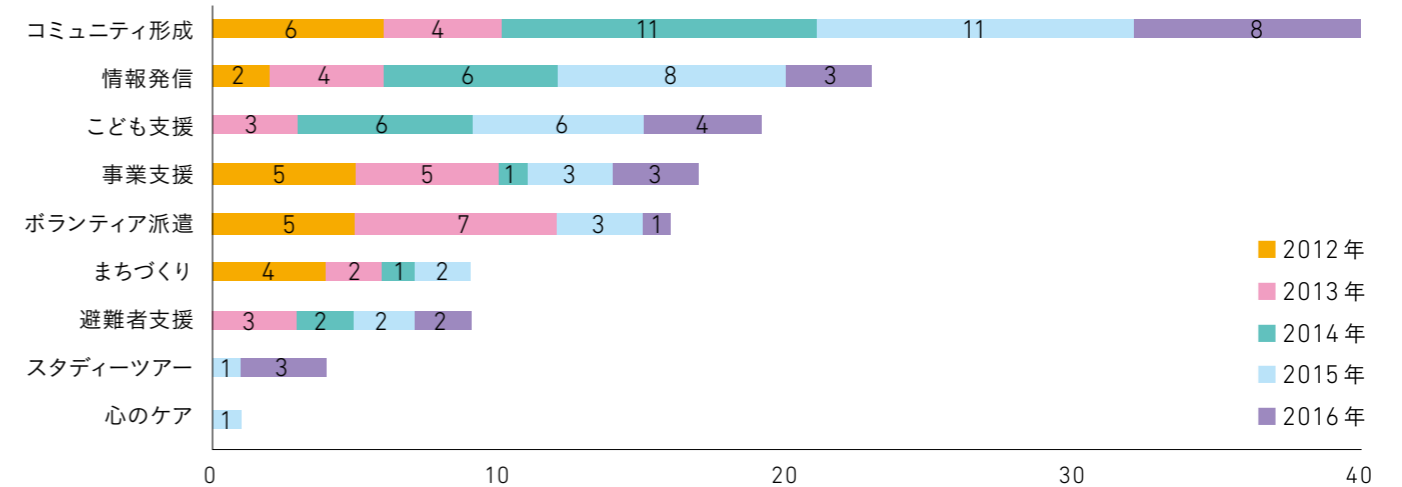


【助成状況】

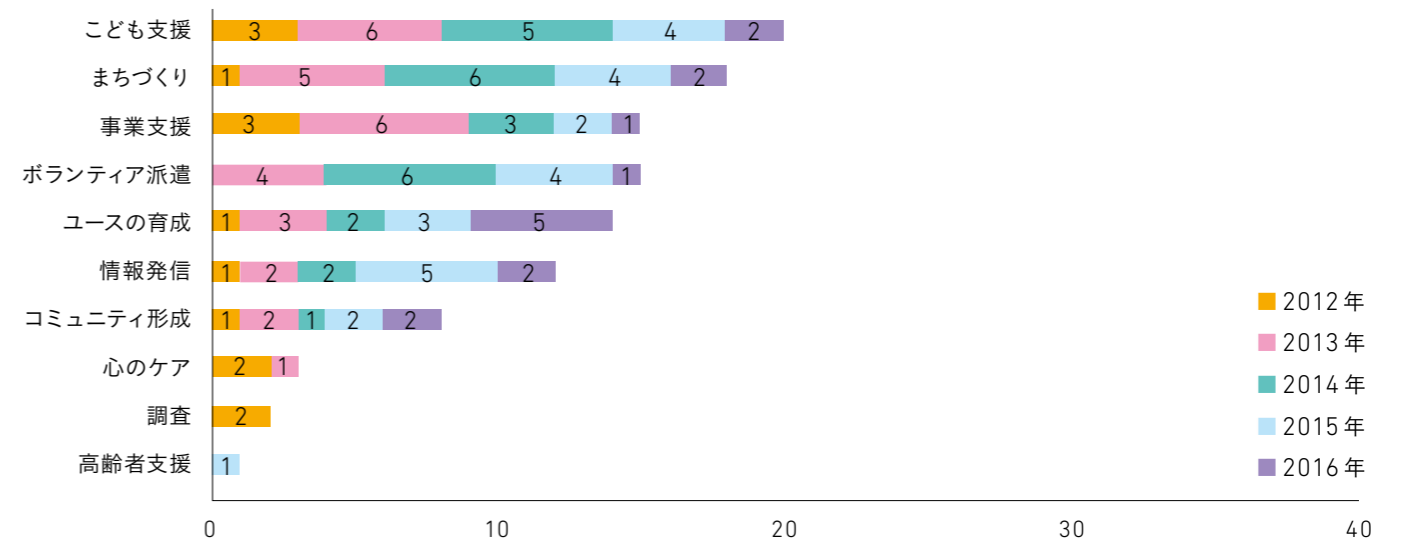
A/Bコース 助成件数／助成総額



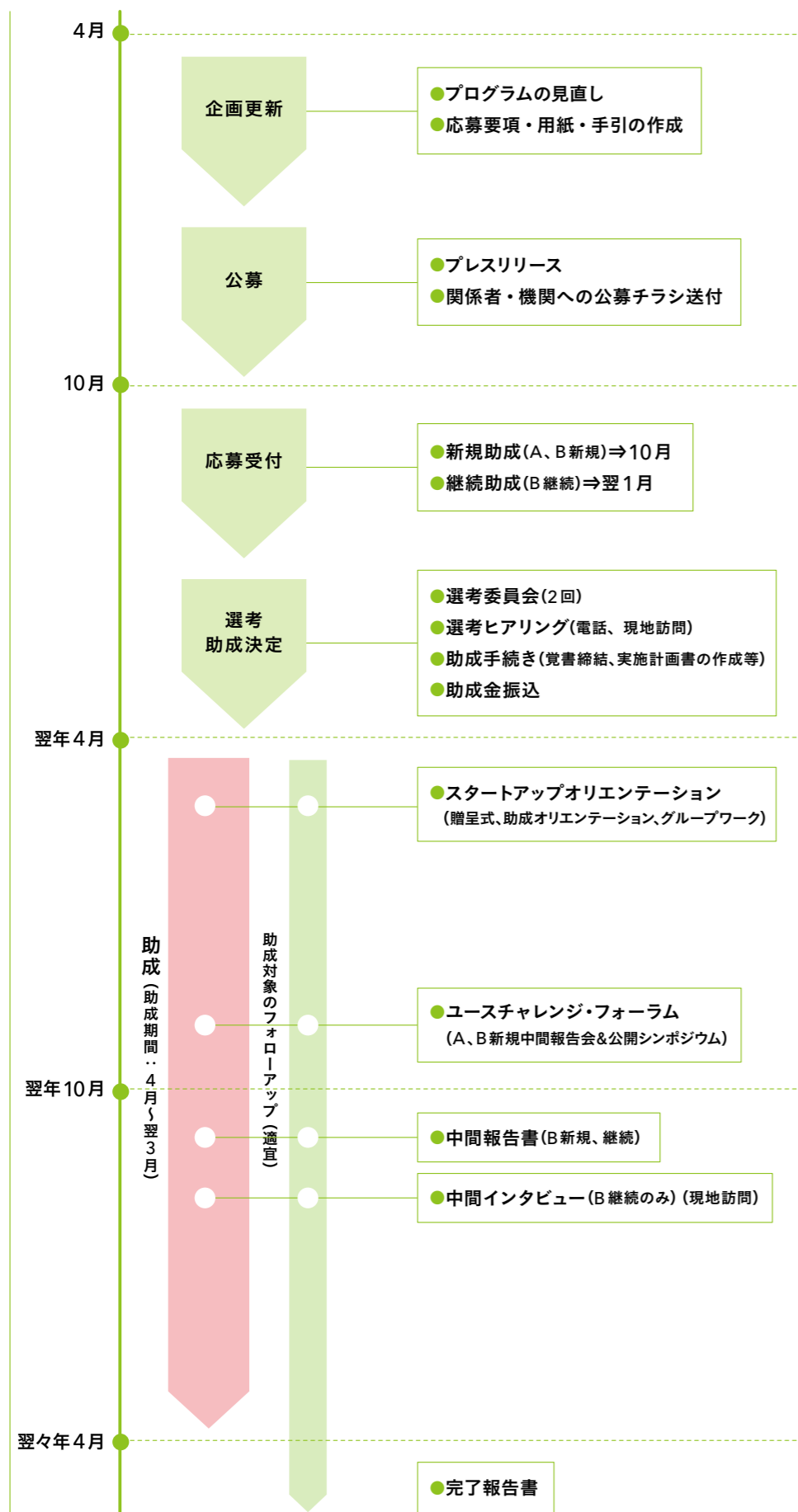
Aコース 助成対象プロジェクトの活動分野



Bコース 助成対象プロジェクトの活動分野



助成の流れ



スタートアップオリエンテーション



ユースチャレンジ・フォーラム



応募要項

東日本の再生過程に若者の参加を

住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム — 活動・研究助成 2016年新規助成 応募要項

応募用紙受付期間：2015年10月15日[木]～30日[金]【必着】

主催：住友商事株式会社 企画・運営協力：特定非営利活動法人 市民社会創造ファンド

1 助成の趣旨

住友商事株式会社は、東日本大震災の被災地の地域再生と被災者の生活再建を願い、その再生過程に参加するユースを応援します。

「東日本大震災の被災地の地域再生と被災者の生活再建」とは、主に岩手県、宮城県、福島県及び被災者の避難先地域での取り組みで、「ユース」とは、おおむね10代後半から20代の若者で、主に大学生・大学院生などを想定しています。

この再生過程にユースが主体的かつ継続的に関わることで、多くのことを学び、経験し、地域や社会のさらなる発展の担い手として成長することを期待し、2012年度より「住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム」を開始しました。このプログラムは、「活動・研究助成※1」と「インターンシップ奨励プログラム※2」から構成されています。今回募集する「活動・研究助成」については、メンバーの構成や組織体制、活動の趣旨などから、AコースとBコースを設けています。Aコースでは、ユースが自分たちで任意のチーム/サークル/グループをつかって取り組む活動や研究へのチャレンジを応援します。また、Bコースでは、NPOや大学・大学院等の組織が、ユースが主体的・継続的に参加できる受け皿となる仕組みをつくり、共に支援に取り組むチャレンジを応援します。

※1— 本助成における「研究」とは、「調査研究」を含みます。

※2— 「インターンシップ奨励プログラム」は、被災地で活動しているNPOにおける長期にわたるユースのインターンシップ活動を応援するものです。詳細は、<http://www.civilfund.org/youth-challenge.html> をご覧ください。なお、2016年度の公募は、2016年4月に行う予定です。

2 助成の対象

(1) 助成の対象となる活動

東日本大震災の被災地の地域再生および被災者の生活再建をめざした活動や研究を対象とします。

Aコース：ユースが任意のチーム/サークル/グループで取り組む活動や研究

Bコース：NPO/大学(院)等の組織においてユースが主体的に取り組む活動や研究

※A・Bコースの何れかを選んで応募してください(同一団体が複数の応募をすることはできません)。

※さらに、各コース内で「活動」または「研究」の何れかを選んでください。

なお、大学(院)等の単位認定となる活動は対象となりません。

(2) 助成の対象となる団体

助成の対象となる団体は下記の要件を満たすものとします(個人への助成は行いません)。

① 被災地や被災者を対象に活動する営利を目的としないチーム/サークル/グループ及びNPO等(以下団体という)。

② 被災地や被災者への支援活動の経験があること(団体所属メンバー個人の経験でも可)。

③ 法人格の有無や種類は問わない。

④ 団体の目的や活動の内容が特定の政治・宗教に偏っていないこと。反社会的勢力とは一切関わっていないこと。

(3) 調査・研究に関する倫理規定

応募プロジェクトにおいて、人間を対象とした調査・研究を行う場合は、下記の記載事項または団体やメンバーの所属機関・学会等の倫理規定を順守するものとします。

① 個人情報保護が守られている。

② 被調査者の不利益につながらない。

③ 被調査者等に結果および成果がフィードバックされる。

④ 結果および成果が被災地の地域再生や被災者の生活再建に活かされる。

3 助成の概要

(1) 助成期間

2016年4月1日～2017年3月31日(1年間) この期間内に助成金を使用する活動や研究を対象とします。

(2) 助成額

1) 助成総額	2) 1件あたりの助成額	3) 助成件数	4) 助成金の使途
最大 6,000万円	① Aコース：10万円以上50万円まで ② Bコース：50万円以上300万円まで	① Aコース：最大 30件 ② Bコース：最大 15件	活動に必要な費用(費目ごとの上限はありません。但し、Aコースについては、人件費は対象外とします。)なお、大学の委任経理に関する費用(オーバーヘッド)は、対象外とします。

4 選考方法

(1) 選考方法

- 応募内容に基づき、専門家及びNPO・主催企業の実務関係者などにより構成する選考委員会にて選考します。
- 選考の過程で追加資料の提出、応募責任者へのインタビューを行う場合があります。

(2) 選考基準

(A・Bコース共通)

- ① 被災地の地域再生支援、被災者の生活再建支援としての意義があるか。
- ② コースが主体的に参加しているか。
- ③ 支援の目的が明確で、実現方法が適切か。(Bコースのみ)
- ④ コースが主体的に活動できる仕組みづくりをしているか。
- ⑤ 現地の状況と課題を十分に踏まえているか。
- ⑥ 持続性のある展開が考えられているか。

(3) 選考結果

- 2016年3月中旬までに全応募者に文書でお知らせします。
- 住友商事株式会社、特定非営利活動法人市民社会創造ファンドのWEBサイトで公表します。

5 応募方法

(1) 応募用紙受付期間 2015年10月15日[木]～30日[金]【必着】

(2) 応募書類の入手方法 応募要項・応募用紙作成の手引き・応募用紙(入力用)は下記URLからダウンロードしてご利用ください。

(Aコース)

- 応募要項/応募用紙作成の手引き(pdf) : <http://www.sumitomocorp.co.jp/files/user/doc/csr/youth/fund2016a-tebiki.pdf>
- 応募用紙(word) : <http://www.sumitomocorp.co.jp/files/user/doc/csr/youth/fund2016a-oubo.doc>

(Bコース)

- 応募要項/応募用紙作成の手引き(pdf) : <http://www.sumitomocorp.co.jp/files/user/doc/csr/youth/fund2016b-tebiki.pdf>
- 応募用紙(word) : <http://www.sumitomocorp.co.jp/files/user/doc/csr/youth/fund2016b-oubo.doc>

※ダウンロードした応募用紙(word)は必ず保存してからご入力ください。

応募書類の郵送をご希望の場合は、「住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム 応募書類の送付希望」と明記の上、送り先の郵便番号・住所・団体名・氏名・電話番号を記載し、<応募用紙の送付先・問い合わせ先>までお申し込みください。

(3) 応募用紙の送付先・問い合わせ先

応募用紙に必要事項を記入の上、必要書類を下記<応募用紙の送付先・お問い合わせ先>まで郵送してください。(担当窓口へのご持参、FAX、E-Mailでの応募は受け付けません。)

● 必要書類

- ① 応募用紙(1部)
- ② 応募用紙のコピー(1部)

※応募時には添付資料は不要ですが、後日必要に応じて事務局より依頼させていただく場合があります。

※応募用紙のホッチキス止め、両面コピー、2つ折りはしないでください。

※応募用紙は返却しませんので、控えを手許に残してください。

<応募用紙の送付先・問い合わせ先>

住友商事株式会社 環境・CSR部(担当:安田、秋葉) 〒104-8610 東京都中央区晴海1-8-11

E-mail: sumisho-youth-challenge@sumitomocorp.com 電話:03-5166-3653、3401

6 助成手続等

(1) 助成手続き 助成対象となった場合には、応募団体と住友商事株式会社との間で「覚書」を取り交わし、所定の手続きを経た上で助成を開始します。

(2) 助成金の支払 助成金は、原則として下記のとおり団体名義の銀行口座に支払います(団体名義の銀行口座がない場合は代表者名義の銀行口座でも可)。

① Aコース:2016年4月末日までに一括 ② Bコース:2016年4月末日までに助成額の60%、中間報告書受取後に残り40%

(3) 報告義務 ① 中間報告書の提出 ② 完了報告書の提出 ③ 中間報告会における報告または中間インタビューへの協力

(4) その他 住友商事株式会社の社会貢献活動に関する広報活動への協力をお願いする場合があります。また、助成期間中に、本プログラム主催者が活動現場の見学をさせていただくことがあります。

● 個人情報の取り扱いについて

応募を通じてご提供いただいた応募者の個人情報は、本プログラムの選考・運営の目的のために使用します。

助成対象となった団体については、団体名・代表者氏名、助成額、所在地(都道府県・市区町村名)、活動内容、成果等を必要に応じて公表させていただきます。

● 主催・協力団体について

住友商事株式会社 <http://www.sumitomocorp.co.jp>

住友商事グループは、「健全な事業活動を通じて豊かさを実現すること」を使命とし、全世界に展開するグローバルネットワークとさまざまな分野における企業・消費者との信頼関係をベースに、多様な商品・サービスの国内外取引や事業投資など、総合力を発揮して多角的な事業活動を展開しています。

特定非営利活動法人市民社会創造ファンド <http://www.civilfund.org>

市民社会創造ファンドは、個人・企業・団体などからの多様な寄付や助成金の受け皿となり、個別のNPOが行う特定のテーマの活動に対して助成を行う、専門的なコンサルティング機能を備えた資金仲介組織です。

住友商事株式会社 環境・CSR部(担当:安田、秋葉)

〒104-8610 東京都中央区晴海1-8-11 E-Mail: sumisho-youth-challenge@sumitomocorp.com / TEL:03-5166-3653、3401

インターンシップ奨励プログラム

1 インターン受入れ団体と人数(21団体、74名)

岩手	団体名	団体所在地	2012	2013	2014	2015	2016	主な活動内容
1	特定非営利活動法人未来図書館	盛岡市			2	2	2	子ども支援
2	特定非営利活動法人いわて連携復興センター	北上市			1	1	1	市民活動団体支援
3	特定非営利活動法人盛岡YMCA	盛岡市			2	1	2	子ども支援
4	特定非営利活動法人サンガ岩手	盛岡市				1		地域コミュニティ交流支援
計					5	5	5	

宮城	団体名	団体所在地	2012	2013	2014	2015	2016	主な活動内容
5	特定非営利活動法人 せんだい・みやぎ NPO センター	仙台市	2	2	1	1		市民活動団体支援
6	特定非営利活動法人グループゆう	仙台市	1					高齢者・障がい者支援
7	特定非営利活動法人都市デザインワークス	仙台市	1	1				まちづくり
8	国際交流協会ともだち in 名取	名取市	1					多文化共生支援
9	認定特定非営利活動法人 Switch	仙台市	1	2	1	1	2	若者・障がい者支援
10	一般社団法人ふれいん・ゆに〜くす	仙台市	1	1				障がい者支援
11	特定非営利活動法人アスイク	仙台市		2	2	1		子ども・学習支援
12	特定非営利活動法人にじいろクレヨン	石巻市		1				子ども支援
13	認定特定非営利活動法人 冒険あそび場—せんだい・みやぎネットワーク	仙台市		2	1	1	2	子ども支援
14	認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる	仙台市		2	1	1	1	市民活動団体支援
計			7	13	6	5	5	

福島	団体名	団体所在地	2012	2013	2014	2015	2016	主な活動内容
15	認定特定非営利活動法人 FukushimaNPOネットワークセンター	福島市		2	2	2	2	市民活動団体支援
16	特定非営利活動法人コースター	郡山市		2				若者支援
17	特定非営利活動法人ビーンズふくしま	福島市		1	2			子ども・若者支援
18	特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ	福島市		1				市民活動団体支援
19	特定非営利活動法人いざがサポーターズクラブ	福島市			1	2	1	まちづくり・観光の推進
20	特定非営利活動法人コーヒータイム	二本松市			1	1	1	障がい者支援
21	特定非営利活動法人シャローム	福島市			1	1		障がい者支援
計				6	7	6	4	

■ インターンシップ9ヶ月の歩み



事前研修と入校式を通してすっかり意気投合したインターン達。いよいよインターン活動のスタートです。



活動も折り返し地点。インターンの報告が刺激となり、後半の活動に対する意欲が高まります。

事前研修/入校式

各受入れ団体にて活動開始

中間報告会

6月

7月

11月



各県ごとに被災状況や震災復興の様子について事前に調べ、合宿で発表。被災地に対する想いを語り合いました。
(2016年度のみ実施)

3県合同合宿

12月



9ヶ月間の活動に対する想いがたくさん詰まった報告書。報告書はフォローアップインターン*1が企画・編集しています。

*1——活動終了後の4月～6月の3ヶ月間、現地協力団体にて修了報告書の企画・編集、次年度の広報活動等に取り組むインターンのこと。

修了報告会

翌3月

修了報告書刊行

6月



堂々と修了報告するインターン達は、活動をやり遂げた自信にあふれています。活動を通して得た学びと経験は一生の宝物です。

応募要項

東日本の再生過程に若者の参加を

住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム インターンシップ奨励プログラム 2016

応募用紙受付期間：2016年4月23日[土]～5月16日[月]【当日必着】
主催：住友商事株式会社 企画・運営協力：特定非営利活動法人市民社会創造ファンド

詳しくはWEBで <http://www.civilfund.org/youth-challenge.html>

住友商事株式会社は、東日本大震災の被災地の地域再生と被災者の生活再建を願い、その再生過程に参加するユースを応援します。このプログラムは、「活動・研究助成」と今回募集を開始する「インターンシップ奨励プログラム」の2つで構成されます。「インターンシップ奨励プログラム」は、被災地で活動しているNPOを活動現場とし、長期にわたるユースのインターンシップ活動を応援するものです。2012年度より開始し、宮城県、福島県、岩手県の3県で展開しています。

お問い合わせ先
宮城県：特定非営利活動法人市民社会創造ファンド／TEL：03-5623-5055
福島県：認定特定非営利活動法人ふくしまNPOネットワークセンター／TEL：024-572-7930
岩手県：特定非営利活動法人未来図書館／TEL：019-654-6601

【プログラム概要】

1. インターンの応募について

(1) **対象者** ユース世代(大学生/大学院生/専門学校生など)、主に10代後半～20代まで
(2) **インターン数** 各県により異なります(各受入団体に1～2名)
(3) **応募期間** 2016年4月23日(土)～5月16日(月) *当日必着

2. インターンシップの内容

(1) **インターンシップ期間・活動時間** 2016年7月1日～2017年3月31日までの9ヶ月間で200時間～300時間程度
(2) **各受入れ対象団体の活動カリキュラムはWEBサイトでご覧いただけます。** <http://www.civilfund.org/youth-challenge.html>

3. 主なスケジュール

2016年6月26日(日)	事前研修/入校式(終日) *1
2016年7月	各受入団体にて活動開始
2016年11月	中間報告会 *2
2017年3月	修了報告会 *2
2017年4月	修了報告書提出

○事前研修/入校式、中間報告会、修了報告会には必ずご参加下さい。
*1——事前研修/入校式は、福島市で3県合同開催します。
*2——中間報告会及び、修了報告会の日程は各県の応募要項でご確認ください。

4. インターンへの支援等

奨励金：活動1時間あたり800円(上限300時間)
交通費：インターンの通学先または自宅から、受入れ団体までの往復交通費(実費)(片道上限1,000円、定期券区間分除く)
研修補助費：研修活動のための旅費や集会参加費など(期間中上限2万円)
保険：傷害保険と損害賠償保険に加入

5. 応募・選考について

(1) **応募書類(応募書類と小論文)**：以下の書類をお送りください
●応募用紙(WEBサイトからダウンロード可)
●小論文(2000字程度)
下記の①②どちらかのテーマをお選びください。
①「インターン活動でチャレンジしたいこと」
②「インターン活動を終えた9ヶ月後の私へ」

(2) **面接(書類審査通過者のみ)**
面接場所・面接日程は決まっていますので、下記WEBサイトで必ずご確認ください。
<http://www.civilfund.org/youth-challenge.html>

6. 各県の受入れ団体

- 宮城県**
- 受入れ対象団体[3団体]
 - 認定特定非営利活動法人 Switch (仙台市宮城野区榴岡1丁目6-3 東口鳳月ビル602)
 - 認定特定非営利活動法人冒険あそび場せんだい・みやぎネットワーク (仙台市青葉区国分町3丁目8-17 日東ハイツ202)
 - 認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる (仙台市宮城野区榴岡3-11-6 コーポラス島田B6)
 - 書類送付先・問い合わせ先 平日9時30分～17時
〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町1-4-3 日本橋MIビル1F
特定非営利活動法人市民社会創造ファンド
インターンシップ奨励プログラム事務局(担当：霜田・武藤)
E-Mail：mshimoda@civilfund.org
Tel: 03-5623-5055
- 福島県**
- 受入れ対象団体[4団体]
 - 特定非営利活動法人いざかサポーターズクラブ (福島市飯坂町字湯沢26番地)
 - 特定非営利活動法人コーヒータイム (二本松市金色402-1 2F)
 - 特定非営利活動法人シャローム (福島市松川町字東原17番地の3)
 - 認定特定非営利活動法人ふくしまNPOネットワークセンター (福島市太田町12-30 マルベリービル6階)
 - 書類送付先・問い合わせ先(現地協力団体) 平日10時～17時
〒960-8068 福島市太田町12-30 マルベリービル6階
認定特定非営利活動法人ふくしまNPOネットワークセンター
インターンシップ奨励プログラム事務局(担当：内山・桜井)
E-Mail：center@f-npo.jp
Tel: 024-572-7930
- 岩手県**
- 受入れ対象団体[4団体]
 - 特定非営利活動法人いわて連携復興センター (北上市大通り1-3-1 おでんせプラザぐろーぶ4階)
 - 特定非営利活動法人サンガ岩手 (盛岡市名須川町3-12)
 - 特定非営利活動法人盛岡YMCA (盛岡市本町通3-1-1 STマンション1F)
 - 特定非営利活動法人未来図書館 (盛岡市肴町4-20 永卯ビル3階)
 - 書類送付先・問い合わせ先(現地協力団体) 平日9時～17時
〒020-0878 盛岡市肴町4-20 永卯ビル3階
特定非営利活動法人未来図書館
インターンシップ奨励プログラム事務局(担当：恒川・田上)
E-Mail：river115@miraitoshokan.com
Tel: 019-654-6601

東日本大震災の再生過程に若者の参加を
住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム 5年の挑戦

発行日 2017年12月27日
発行元 住友商事株式会社
サステナビリティ推進部
〒104-8610 東京都中央区晴海1-8-11
TEL: 03-5166-3401

編集 特定非営利活動法人 市民社会創造ファンド

デザイン 阿部太一[GOKIGEN]
文章化 古川智子(P.6-13)、香月真理子(P.14-21)
撮影 橋本裕貴(表2、表3、P4-21)
表紙・扉イラスト 加納徳博

印刷製本 株式会社 山田写真製版所



